

秋田県文化財調査報告書第182集

西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書IV

—用野目川向Ⅲ遺跡—

1989・3

秋田県教育委員会

西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書IV

—用野目川向Ⅲ遺跡—

1989・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。この貴重な文化財を保護し継承していくことは、私たちの現在と未来にとって必要欠くべからざることであります。

このたび農業用基幹道路として、西山地区農免農道整備事業が計画され、路線の一部が用野目川向Ⅲ遺跡を通過することになり、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代の竪穴遺構や平安時代の竪穴住居跡などが発見されました。

本書は、調査成果をまとめたものであります、埋蔵文化財保護へのご理解と郷土の歴史解明にご活用いただければ幸いです。

最後に、この調査にご協力いただきました秋田県農政部鹿角農林事務所、鹿角市教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

平成元年3月25日

秋田県教育委員会

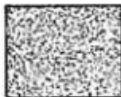
教育長 斎藤 長

例　　言

1. 本書は、鹿角市西山地区農免農道整備事業に係る用野目川向Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行5万分の1「花輪」「田山」「大館」「大葛」である。
3. 本遺跡の発掘調査、本書の作成に際し、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査第一課課長市幸生氏、鹿角市教育委員会社会教育課大湯環状列石整備対策室主任秋元信夫氏、秋田県立十和田高等学校教諭鎌田健一氏より御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、第2章第2節、第4章第2節中2. 平安時代の堅穴住居跡を磯村亭が、他を小畠巖が行った。

凡　　例

1. 坚穴住居跡等遺構の柱穴に付した数字は、床面からの深さを表わす。(単位cm)
2. 各遺構に付している略記号は次の通りである。
SI…堅穴住居跡　　SKI…堅穴遺構　　SK…土坑
3. 本文中にRPあるのは、遺構調査中に出土した土器・土製品を表わす略記号である。
4. 土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖』に従った。
5. 採図に使用したスクリーントーン及びシンボルマークは次の通りである。



燒　　土



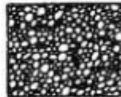
土　　器



黑色處理



石　　器



底部に砂粒が
付着しているもの



鉄製品

目 次

序	i
例言・凡例	ii
目 次	iii
第1章 はじめに	1
第1節 発掘調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 自然的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 発掘調査の概要	6
第1節 遺跡の概観	6
第2節 調査の方法	6
第3節 調査経過	8
第4章 調査の記録	10
第1節 検出遺構と出土遺物	10
1. 縄文時代	10
2. 平安時代	10
(1)堅穴住居跡	10
(2)土坑	29
3. 時期不明の遺構	34
第2節 遺構以外出土遺物	39
第5章 まとめ	40

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	
第2図 遺跡地形図	7
第3図 SKI01堅穴道構出土遺物実測図	11
第4図 SKI01堅穴道構出土遺物実測図・拓影図	12
第5図 SII01堅穴住居跡実測図	13
第6図 SII01堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)	14

図 版 目 次

3 図版1 1 遺跡遠景(西から)	45
7 2 遺跡近景(北から)	
11 図版2 1 基本+層堆積(南から)	46
12 2 SKI01堅穴道構(中央)・SKI1土坑プラン	
13 確認状況(南から)	
14 図版3 1 SKI01堅穴道構上層地質状況(南西から)	47

第7図 SI01堅穴住居跡出土遺物実測図(2)	15	2 SKJ01堅穴遺構完掘状況(北から)
第8図 SI02堅穴住居跡実測図	17	図版4 1 SI01-02-03堅穴住居跡・土坑群プラン 確認状況(北から) 48
第9図 SI02堅穴住居跡貼り床範囲	18	
第10図 SI02堅穴住居跡カマド尖端図	19	2 SI01-02-03堅穴住居跡・土坑群完掘状況
第11図 SI02堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)	20	(北から)
第12図 SI02堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)	21	図版5 1 SI02カマド遺物出土状況(北から) 49
第13図 SI03堅穴住居跡実測図	22	2 SI06堅穴住居跡プラン確認状況(南から)
第14図 SI03堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図	23	図版6 1 SI06堅穴住居跡炭化材出土状況(北から) 50
第15図 SI06堅穴住居跡尖端図	24	2 SI06堅穴住居跡掘り方(北から)
第16図 SI06堅穴住居跡焼土・炭化材出土状況図	25	図版7 1 SK01土坑完掘状況(南西から) 51
第17図 SI06堅穴住居跡掘り方尖端図	26	2 SK02土坑完掘状況(南東から)
第18図 SI06堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)	27	3 SK03土坑完掘状況(西から)
第19図 SI06堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)	28	4 SK05土坑完掘状況(東から)
第20図 SK05土坑実測図	30	5 SK06土坑完掘状況(西から)
第21図 SK05土坑出土遺物尖端図・拓影図	31	6 SK10完掘状況(北から)
第22図 SK08,SK08,SK10,SK11土坑実測図	32	図版8 1 SI01堅穴住居跡出土墨青土器 52
第23図 SK14,SK15,SK16土坑実測図	33	2 SI01堅穴住居跡出土土器
第24図 SK14,SK15上坑出士遺物実測図	34	図版9 1 SI01堅穴住居跡出土土器 53
第25図 SK01,SK02,SK04,SK06上坑実測図	35	2 SI01堅穴住居跡出土須恵器
第26図 SK07,SK09,SK12,SK13土坑実測図	37	図版10 SI02堅穴住居跡出土土器 54
第27図 遺構外出土遺物実測図・拓影図	38	図版11 SI02堅穴住居跡出土土器 55
第28図 遺構配置図(上)基本土層図(下)	61	図版12 SI02堅穴住居跡出土土器 56
		図版13 SI02堅穴住居跡出土土器 57
		図版14 SI06堅穴住居跡出土土器 58
第1表 周辺遺跡一覧表	4	図版15 SK01堅穴遺構出土土器 59
		図版16 1 SK05土坑出土上器 60
		2 SK15土坑出土鐵製品

表 目 次

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

鹿角市西山地区は、主に果樹と畠作物を栽培する地域である。ここで生産される農作物の搬出路を確保することを目的に、昭和57年秋田県農政部によって農免農道整備事業が計画された。計画された農免農道は、鹿角市尾去沢の北方約1kmにある久保田橋を起点とし、同市神田までを結ぶ全長約6.5kmであった。これに伴い、計画路線内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、秋田県農政部鹿角農林事務所の依頼を受け、秋田県教育委員会が調査に着手することになった。昭和59年に遺跡分布調査、昭和60、62年に遺跡範囲確認調査が行われた。その結果、太田谷地館跡、高屋館跡、高瀬館跡、堪忍沢遺跡、用野目川向田遺跡の5遺跡が調査の対象となることが判明した。発掘調査は、昭和61年度に高瀬館跡、堪忍沢遺跡、昭和62年度には太田谷地館跡について実施された。昭和63年度には、太田谷地館跡の第2次調査と用野目川向田遺跡の調査が行われたのである。

第2節 調査の組織と構成

所在地	秋田県鹿角市花輪字用野目川向116-6、115-3他
調査期間	昭和63年8月29日～10月14日
調査対象面積	1,200m ²
調査面積	1,200m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	小畠 巍(秋田県埋蔵文化財センター学芸主事) 磯村 亨(秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)
調査事務担当者	加藤 進(秋田県埋蔵文化財センター主査) 高橋忠太郎(秋田県埋蔵文化財センター主事)
調査協力機関	秋田県鹿角農林事務所 鹿角市教育委員会

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

秋田県の北部、岩手県と境を接する鹿角市は、東側に奥羽脊梁山脈、西側に高度100～400mの低山地、さらにその間に米代川、大湯川、小坂川等によって形成された花輪盆地に大きく分けることができる。用野目川向Ⅲ遺跡は、この花輪盆地を見下ろすことができる西側の低山地の東辺、北緯40度12分、東経140度46分に位置する。このあたりには、十和田火山起源の火山噴出物が広範囲に分布しているが、本遺跡もその上に立地している。遺跡の周辺は、おかげ、たばこ等の畠作物の栽培と山林に利用されている。

第2節 歴史的環境(第1図、第1表)

第1図は、用野目川向Ⅲ遺跡と周辺の遺跡の分布図である。図から、米代川流域に形成された河岸段丘上(標高200m前後)に遺跡が多く分布しているのがわかる。本遺跡付近では遺跡の分布密度が低いが、北方約3km付近(38～51, 53, 54)、東方約3.5km付近(6～18, 56～63)では密度が高い。密度の低い要因として、未利用地が多いことや大湯浮石層により先史時代の遺物が地表にあらわれにくいこと等が考えられる。東北縦貫自動車道、西山農免農道などの工事にともない発掘調査されている遺跡も多い。ここでは本遺跡周辺米代川流域について、発掘調査が行われた遺跡を中心に各時代ごとの歴史的環境について簡単にみていく。

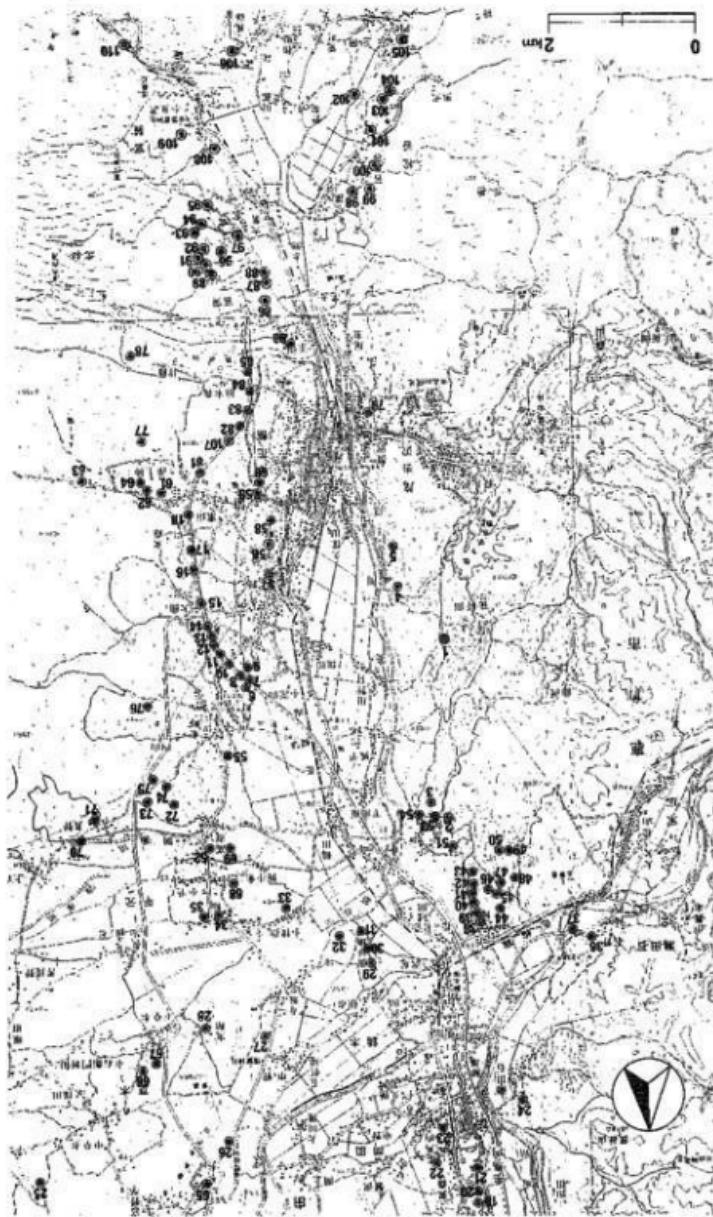
鹿角市では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代の遺跡は多数確認されているが、代表的なものとして本遺跡の東方約2.5kmに大戸森遺跡(56)が所在する。前期から晩期にかけての遺物が出土し、中期中葉から末葉にかけての竪穴住居跡が140軒検出されており、この時期の遺跡としては県内最大のものである。この他、早期～晩期に位置づけられる猿ヶ平II遺跡(15)、後期のものでは「ストーン・サークル」で知られる大湯環状列石(26)があげられる。

弥生時代については、単一の遺跡は発見されておらず、表からわかるように他時代との複合遺跡として確認されているだけである。出土する遺物は、主として小坂X式に比定される土器である。

平安時代に営まれたとされる太田谷地館跡(2)、堪忍沢遺跡(5)は、本遺跡同様西山地区に所在し発掘調査も行われ多大の成果がえられた。前者は、竪穴住居跡56軒、空堀3条、土坑等が

第1圖 圖測の結果



第2圖 路史的標記

第2章 遺跡の立地と環境

第1表 沿辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	用賀山川向遺	縄文・弥生・平安	56	火戸	春
2	太田谷地盤	縄文(後期)・平安	57	降	場
3	高屋殿跡	縄文・中世	58	開	休
4	高瀬殿跡	中世	59	白	山
5	塙忍沢	縄文・平安	60	日向原	敷
6	西町	縄文	61	東	山 A
7	西町	縄文	62	東	山 B
8	西町	縄文	63	東	山 C
9	乳牛	縄文(後期)	64	赤坂	B
10	下乳牛	縄文・平安	65	一本木	平
11	乳牛	平安	66	小坂	野
12	東の神田	縄文・平安・中世	67	草木	C
13	東の神田	縄文・平安	68	小字	船
14	東の神田	縄文・平安	69	新斗	米原
15	猪ヶ平	縄文(早期～後期)	70	新	野
16	猪ヶ平	縄文(中期～後期)	71	長	野
17	案内	縄文	72	高	野
18	案内	縄文・平安	73	銀	野
19	柏崎	中世	74	銀	野 I
20	当麻	中世	75	新	野 II
21	高田	古墳	76	新	野 III
22	寺ノ上日	弥生・中世	77	度土神	A-B-C
23	柏崎	縄文(後期)	78	甘	路
24	保	縄文(前・中期)	79	T	モ
25	八幡堂	縄文(後期)	80	玉	内
26	大瀬塚状列石	縄文(後期)	81	孫右衛門	越
27	中ケ野	古墳	82	柏木	森
28	丸	中世	83	明	森
29	冠	平安	84	一木	杉
30	曲谷地 A	古墳	85	上	幕
31	曲谷地 B	古墳	86	清	水
32	祐	古墳	87	駒	移
33	小枝指	中世	88	F	馬
34	平元館	縄文(後期)	89	上	喜
35	平元館	平安	90	上	喜
36	石野	中世	91	北	林
37	石野	古墳	92	北	林
38	上ノ野	縄文(中期)	93	飛	北
39	上ノ野 V	縄文・平安	94	鳥	店
40	上ノ野 VI	縄文・平安	95	歌	内
41	上ノ野 VII	縄文	96	上	重
42	上ノ野 VIII	縄文	97	松	越
43	上ノ野 IX	縄文	98	石	鳥
44	上ノ野 X	弥生	99	後	田
45	上ノ野 XI	縄文	100	大	里
46	上ノ野 XII	縄文	101	モ	和志
47	上ノ野 XIII	縄文	102	二ツ	森
48	坂筋	縄文(後期)	103	田	中
49	坂筋	縄文(後期)	104	下	和志
50	坂筋	縄文(後期)	105	長	内
51	戸羽の武	縄文	106	長	里
52	高市向	中世	107	中の	崎
53	花輪 B	縄文(後期)・弥生	108	小豆	沢
54	花輪 C	縄文(後期)	109	堂	上
55	万谷野	平安	110	大地	平

検出され、平安時代末葉に位置づけられる「集落保塞的」館とされ、後者は、製鉄操業に関連する遺構13基、堅穴住居跡6軒等が確認され10世紀中葉～末葉に操業したものと考えられている。この他、平安時代の堅穴住居跡が49軒検出された歌内遺跡(95)、同じく33軒が検出された妻の神 I 遺跡(14)が代表的なものとしてあげられる。

中世の館跡としては、高屋館跡(3)、高瀬館跡(4)、小枝指館跡(33)等があげられる。いずれも近世初頭に成立したとみられる『鹿角由来記』に記載されている四十二館に含まれるものである。高瀬館、小枝指館は発掘調査され、舶載陶磁、貨幣等が出土している。後者については、昭和33年調査主体の東京大学が刊行した『館址』のなかで出土遺物等から、鹿角の中世館の大半は戦国、繩文期まで使用されていたとされている。

参考文献

- 秋田県 『秋田県総合地質図幅 花輪』 1973(昭和48年)
- 秋田県教育委員会 『太田谷地館跡』 秋田県文化財調査報告書第172集 1988(昭和63年)
- 秋田県教育委員会 『塔忍沢遺跡』 秋田県文化財調査報告書第152集 1987(昭和62年)
- 秋田県教育委員会 『高瀬館跡』 秋田県文化財調査報告書第153集 1987(昭和62年)
- 秋田県教育委員会 『妻の神 I 遺跡・乳牛平遺跡』 秋田県文化財調査報告書第107集 1984(昭和59年)
- 秋田県教育委員会 『歌内遺跡』 秋田県文化財調査報告書第88集 1982(昭和57年)
- 鹿角市教育委員会 『天戸森遺跡』 鹿角市文化財調査資料26 1984(昭和59年)
- 『鹿角市史 第1巻』 鹿角市 1982(昭和57年)
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図』 1976(昭和51年)
- 鹿角市教育委員会 『鹿角の館(3)』 鹿角市文化財調査資料25 1984(昭和59年)

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観(第28図)

調査区のはば中央部を東西に農道が通っており、それを境にして北側に比して南側が低く、比高差1~1.2mを測る。これは南西から谷が入っていることにもよるが、後世に削平された形跡が窺われる。また、調査区周辺にはたばこや陸稲が栽培されており、地山近くまで耕作が及んでいる。このため、鹿角地方に特徴的な大湯浮石層が確認されたのは、農道とその周辺に限られた。もう少し詳しく見てみると、45ラインより南側については、現況が山林であり、黒色土、地山漸移層、地山という堆積が観察される。しかしながら、大湯浮石の堆積は見られなかつた。45~55ライン間については、耕作を受けた痕跡が明白で、地山のロームが混入した黒色土の直下に地山が観察された。55ラインの北側の農道付近の土層は非常に整っており、黒色土、大湯浮石、黒色土、地山漸移層、地山という堆積を示している。57ラインから北に行くにしたがい、大湯浮石は面的にはとらえにくくなる。

図示した上層図は、調査区を南北に分断する農道部分の断面(A)と、50ラインに沿って残したベルトの断面(B)である。

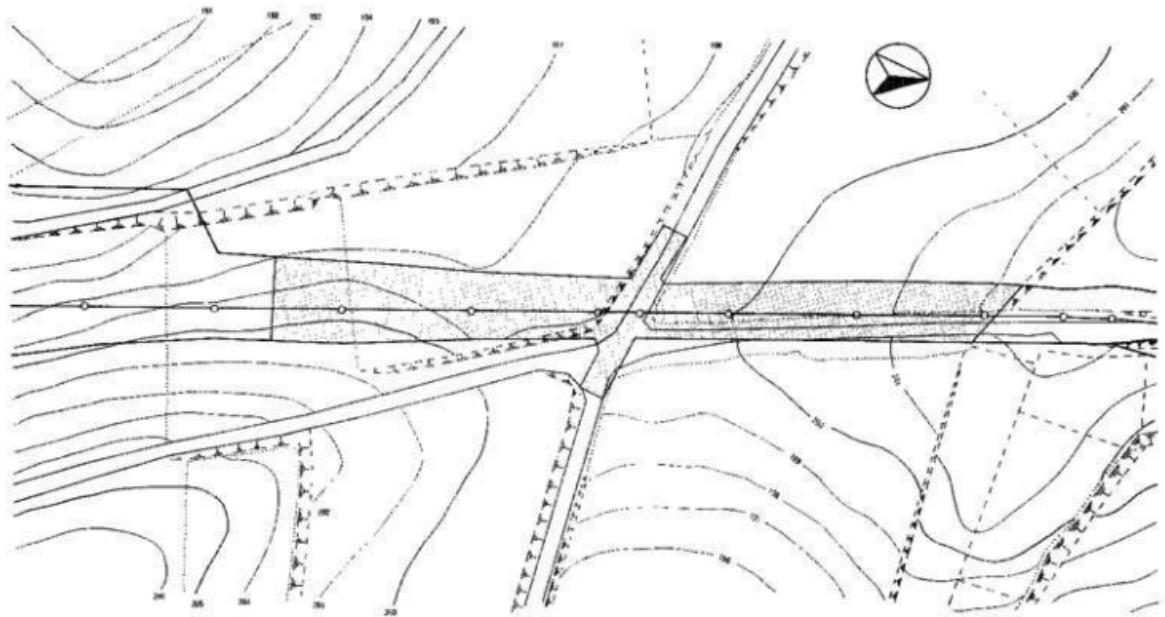
第2節 調査の方法

1 調査区の設定(第2図)

昭和62年9月1日、3日~4日の3日間にわたり範囲確認調査を実施した結果、鹿角農林事務所が設定した道路中心杭No.121+10m~No.127+5mの間の範囲が調査対象区域となった。中心杭No.123を基準点とし、No.123とNo.124を結ぶ直線を基準線として、さらにそれと直交する線を設定し、調査対象区域に4m×4mの方眼(グリッド)をつくるように杭を打設した。グリッド呼称は、縦軸(Y軸)に2桁のアラビア数字、横軸(X軸)に2文字のアルファベットを付し、その組み合わせで呼ぶこととした。基準点とした中心杭No.123を(MA50)として、各グリッドを呼称する。各グリッドは、南東隅の杭の(X,Y)で表示している。グリッドY軸は、N~-4°~-Eを計測する。

2 発掘調査方法

十和田湖の火山の噴出物である大湯浮石層の堆積が予想されたため、遺構のプラン確認を數度にわたり行うこととした。また、耕作が大湯浮石の下まで及んでいる場合でも、遺構埋土中



第2図 遺跡地形図

第3章 発掘調査の概要

に輕石粒が混入しプランを確認できることも考慮して、最低二度にわたってプラン確認を行うこととした。

遺構の調査は、二分法または四分法によることとし、必要に応じて任意に土層観察用のベルトを設定した。記録は、通り方測量と平板測量を併用し、土層図、遺物出土状況図、平面図を作成することとした。また、調査の状況を順を追って写真に記録することとし、遺構の断面、遺物出土の状況、発掘の状況等を中心に撮影を行った。

第3節 調査経過

8月29日午前に作業員説明会を開催し、午後から調査を開始した。調査区内を農道が通っているため、遺構等がかかっていた場合農道の付けかえを含めて調査工程を見直す必要が出てくることも考えられた。そのため農道に沿ってトレッセを設定し、遺構等の有無を確認する作業を優先することにした。その結果、土坑を合計3基(SK01・02・05)検出したのみで、農道部分の遺構密度は小さいと判断された。9月1日調査区南側から表土除去に着手した。測量杭の打設も開始した。9月6日ベルトコンベアが稼働を始め、表土除去が一層進展した。LT47・48・49、MA47・48・49グリッドでSI01・02・03竪穴住居跡と土坑群(SK03・04・06~09・14)のプランを検出した。9月8日SK05土坑から土師器、甕等が出土し始めた。9月10日SI01~03竪穴住居跡と土坑群のプラン確認状況の写真撮影を行った。当該竪穴住居跡は重複しており、SI01→SI02→SI03と新しくなることが判明した。9月13日SK05土坑の遺物の収納を行った後、平面図を作成した。SI01~03竪穴住居跡と土坑群の調査に着手した。9月14日MA53・54グリッド内でSK10竪穴遺構とSK10、11土坑のプランを確認した。9月19日十和田高校の嫌出教諭来歴。大湯浮石を中心とする地質についてレポートを作成中で、土のサンプリングをしていかれた。57ラインから北側について、表土除去作業を開始した。9月22日MA63、64グリッドで方形の竪穴住居跡が2軒重複して検出され、SI05・06とした。遺構の半分近くは調査区外の畑にかかっている。SI06竪穴住居跡からは、プラン確認の時点では炭化材が覗いており、焼失家屋であることが容易に判別できた。MA59グリッド付近では梅円形の落ち込みを確認し、SI07としたものの、調査を進めたところ風倒木痕であることが判明した。9月29日SI01~03竪穴住居跡の遺物収納と土層断面図の作成を行った。南側壁に付設されたカマドは、当初SI01竪穴住居跡のものと考えられたが、SI02竪穴住居跡がSI01竪穴住居跡の南側壁をそのまま利用していることから、SI02竪穴住居跡に付設されたカマドと判断された。10月3日SK10竪穴遺構の埋土中から焼土を検出し、その範囲を記録してさらに掘り下げたところ、底面中央に柱穴と思われるピットを確認した。SI05・06竪穴住居跡は貼り床がなされていることが判明した。10月4日SI06竪穴

住居跡の炭化材の出土状況を写真撮影後、実測図の作成に着手した。SI02竪穴住居跡のカマドの調査に着手した。10月7日SKI01竪穴遺構の周囲を精査したところ、対角線上に柱穴が検出された。10月12日土坑等の調査をほぼ終了した。SI06と重複しているとみられたSI05竪穴住居跡は、床面および柱穴が検出されず、SI06竪穴住居跡と同じ掘り方しか検出されなかった。したがって、住居跡と思われたSI05は、SI06竪穴住居跡がつくられる時の掘り方で、途中からプランを縮小した結果2軒が重複していたように観察されたものであることがわかった。10月14日竪穴住居跡等の完掘写真を撮影し、すべての調査を終了した。

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と出土遺物

本遺跡で検出された遺構は、縄文時代の竪穴遺構1基、平安時代の竪穴住居跡4軒と土坑8基、時期不明の土坑8基である。

1 縄文時代

SK101竪穴遺構(第3・4図、図版2・3・15)

MA54・55グリッド地山面で検出した。南2.5mの地点にSK11土坑が位置する。長軸290cm、短軸250cmの梢円形を呈する。掘り込みは二段になっており、内側の掘り込みは180cm×190cmのはぼ円形である。底面はほぼ平坦であるが、踏み固められたような堅い面は観察されなかつた。中央からやや東に寄った底面にピットを有する。直径25~28cmで、深さは底面から13cmを測る。本遺構の周囲を精査したところ、対角線上に合計4つのピットを検出した。それぞれの数字は、確認面からの深さを表している。埋土は、上位と下位に黒色土が入っており、中位に焼土や炭化物を含む層が観察される。出土した遺物は、この中位の焼土層の上方に集中している。1~4は同一個体で器形は鉢形である。口縁部が小波状を呈し、頸部に平行沈線を4条めぐらせている。胴部にはLR縄文を施している。5と6は同一個体で、LR縄文を施したあと口縁部を磨消して無紋帶としている。7は、口縁部に3条の平行沈線、内側に1条の沈線をめぐらせている。外面には煤が付着している。8~10は、内面に朱が塗布されている。11は、推定の口径と器高がそれぞれ13cm、12.4cmの鉢形土器である。頸部に平行沈線を2条引き、綱位の沈線で4単位に区画した後、さらに2条の平行沈線を充填している。口縁の内面にも1条の沈線がめぐる。内外面とも煤が付着し、底部は磨滅が著しい。

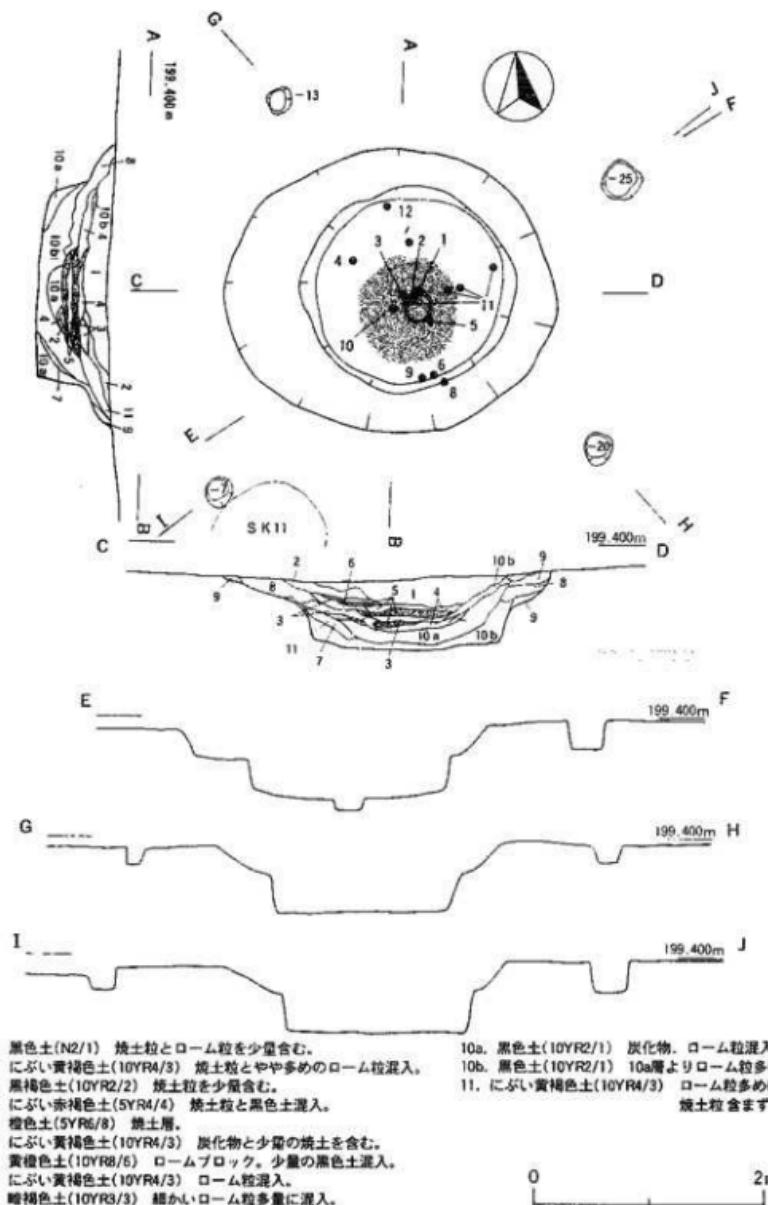
2 平安時代

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡4軒、土坑8基が検出された。土坑については、すべてから時期を決定する遺物が出上したわけないが、埋土中に大湯浮石に特有な軽石粒が含まれていたことから、平安時代に属するものと判断された。

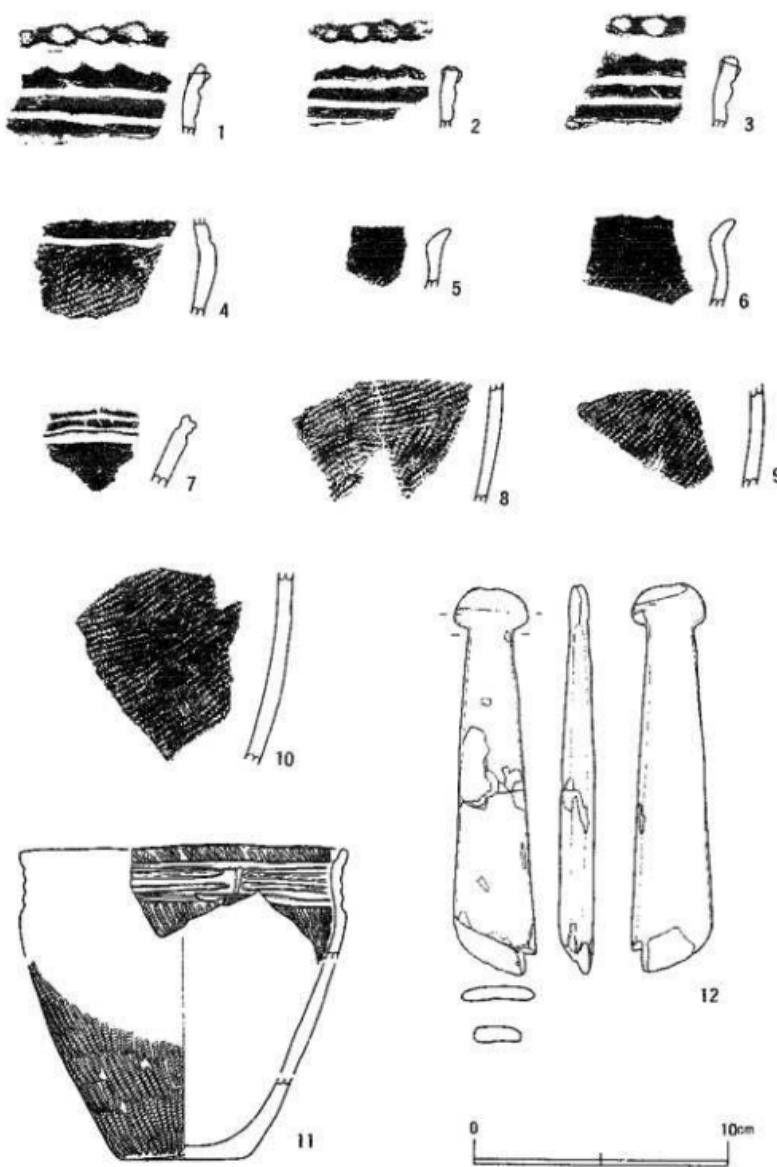
(1) 竪穴住居跡

SI01竪穴住居跡(第5~7図、図版4・8・9)

LT47・48、MA47・48グリッドに検出された。SI02・03竪穴住居跡、SK07・08・14土坑と重複関係にある。すなわち、SK07・14土坑を切って本遺構がつくられ、本遺構はSI02・03竪穴

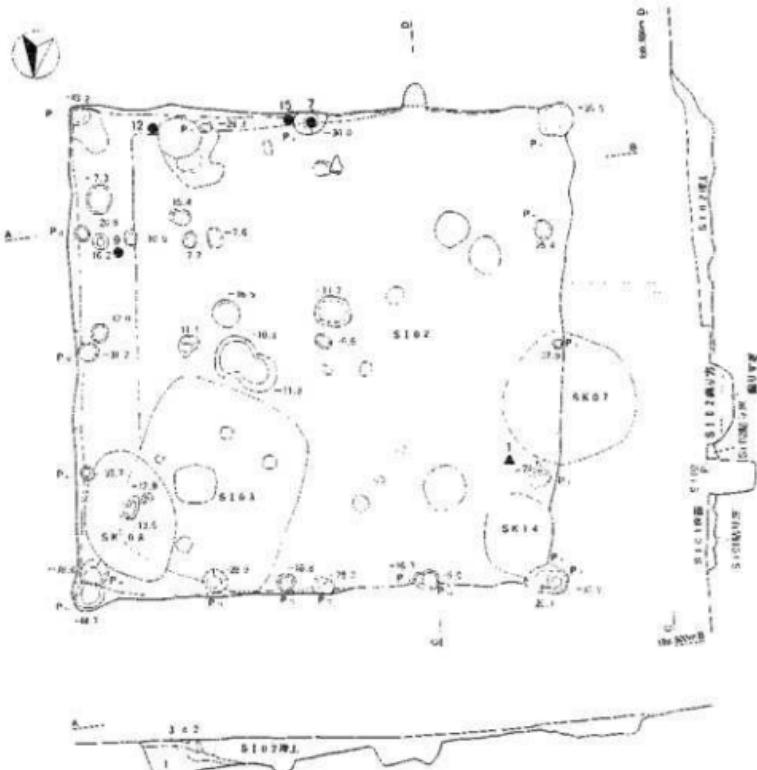


第3図 SK101縦穴遺構実測図



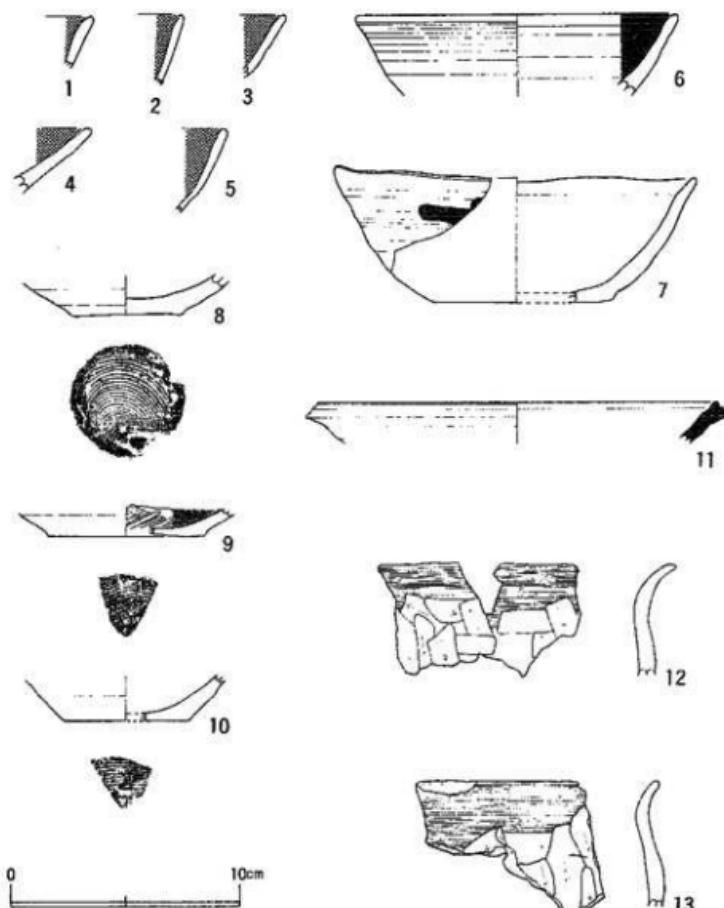
第4図 SK101竪穴遺構出土遺物実測図・拓影図

住居跡、SK08土坑に切られている。東から西に向かって地山が傾斜しているため、西側の壁を検出することができなかった。規模は南側634cm、東側608cm、北側642cm、西側630cm(推定)で、ほぼ方形のプランを呈する堅穴住居跡である。プラン確認面から床面までの深さは南側壁で0~46cm、東側壁で39~51cm、北側壁で0~28cmを測る。床面は地山面を踏み固めたもので非常に固く締まっている。柱穴は、各壁隅部と東側壁際に3本、北側壁際に3本、南側壁際に2本、西側壁際に3本設けられている。柱穴の床面からの掘り込みは5~43cmで、南東、南西側の隅柱はそれぞれ1本(P_1, P_2)、北東、北西側にはそれぞれ2本(P_3, P_4, P_{11}, P_{12})設けられている。この他の柱穴は、埋土が黒褐色あるいは暗褐色で、地山ブロックが密に混入され、非常に固く締まっていることから、本遺構に伴うものでSI02堅穴住居跡が構築される時埋められた

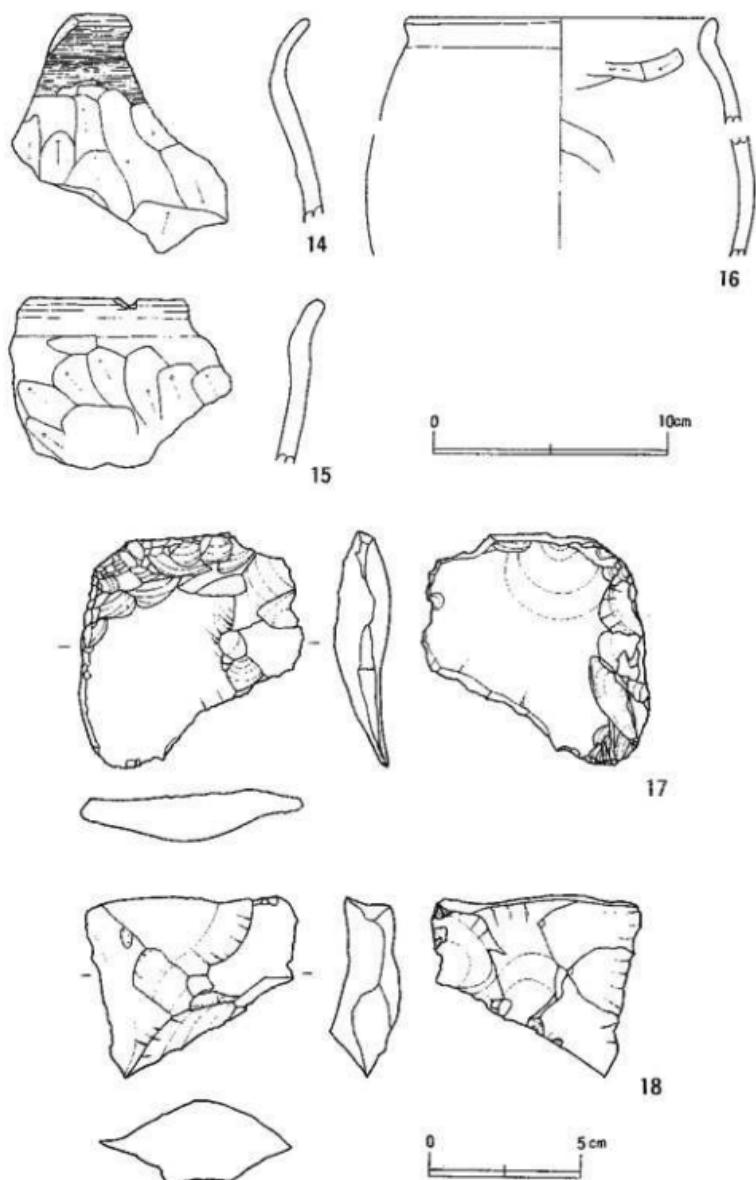


第5図 SI01堅穴住居跡実測図

ものと判断された。深さは、床面から6~16cmである。土層断面の観察は、SI02が大部分重複しているため東側壁から約120cmのところまでしか確認できなかったが、その部分での埋土は4層に分層された。壁は、東側が最も遺存状態が良く、地山面から床面に対してほぼ垂直に掘り込まれている。カマドは検出されなかった。図示できた遺物は、16点である。1~10は、口クロ成形による土師器杯である。1~6は、内面黒色処理されて、外面は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。7は南側壁際床面付近から出土しており、内面が橙色～浅黄橙色、外面が浅黄橙



第6図 SI01堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)

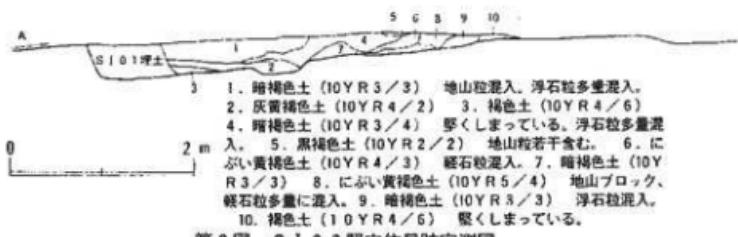
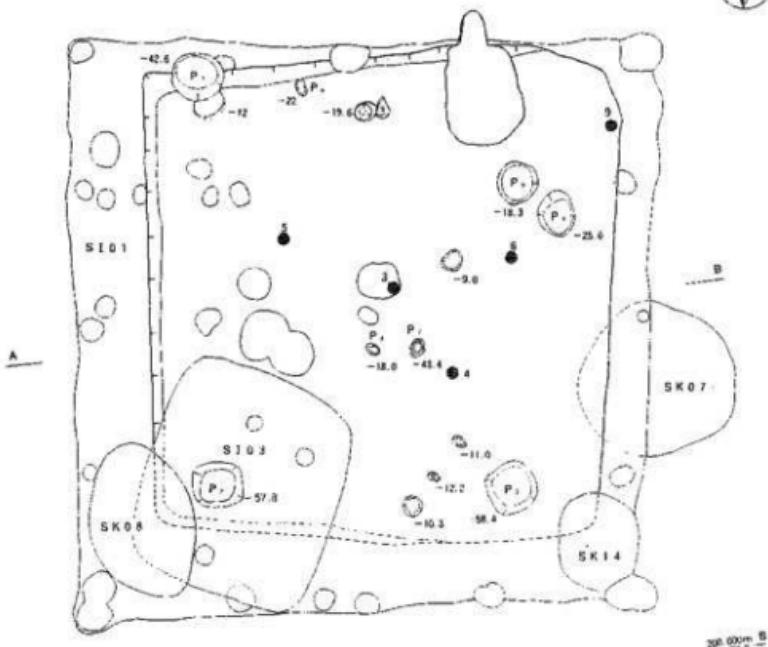


第7図 SI 01 壁穴住居跡出土遺物実測図 (2)

色を呈し、外面に墨書き文字がみられる。口縁の歪みが大きく、口径15.6cm、底径7.2cm、器高5.5cmを測る。8~10は底部に回転糸切り痕が残る。9の内面には黒色処理が施されており、ヘラミガキ痕がみられる。11は、須恵器甕の口縁部である。12~16は、土師器甕の口縁部である。いずれも内面ヘラナデ、外面ヘラナデ、ヘラケズリが施されている。15は埋土中に浮いた状態で出土しており、口唇部をヘラで調整して面をとっている。16は胎土に多量の砂粒を含み、内面が明赤褐色、外面が橙色を呈する。17、18は、フレークである。図に掲載しなかったが、住居跡南東隅の埋土中から鉄滓が出土している。

SI02堅穴住居跡（第8~12図、図版4・5・10~13）

LT47・48、MA47・48グリッドに検出された。SI01堅穴住居跡が廃棄された後、貼り床を施して本造構をつくっている。北側はSI03堅穴住居跡に切られている。方形プランを呈し、南西隅部近くの南側壁にカマドが付設された堅穴住居跡である。主軸方位がS-9°-Eで、壁長は南側498cm、東側482cm、北側472cm、西側494cmで、東側の一部及び北側の壁（破線部）は、調査時に掘りすぎたため推定ラインである。プラン確認面から床面までの深さは、0~36cmである。SI01堅穴住居跡同様地山が東から西に傾斜しているため、西寄りの壁は認められなくなる。床面の大部分は貼り床で、貼り床に使われた土はいくつかに分けることが可能であった。すなわち、1. 黒褐色土+地山ブロック、2. 黒褐色土+地山ブロック+軽石ブロック、3. 黒褐色土少量+地山ブロック+軽石ブロック、4. 地山土主体の黒褐色土、5. 暗褐色土+地山ブロックで炭化物混入、6. 暗褐色土主体の地山ブロックで炭化物、焼土粒子混入の6種類である。柱穴は全部で13本検出された。P_i~P_jの規模は、直径約50cm、床面からの深さが42~57cmを測る。埋土は、暗褐色で非常にもろくボロボロしている。軽石の混入は見られなかった。P_i~P_jの埋土はこれらに良くており、同時に埋まったものと考えられる。カマドは、南側壁の西寄りに付設されている。天井部が崩落しており、遺存度は良くなかった。貼り床を施した後に、カマドを付設する範囲を楕円形に掘り込んでいる。その後に、袖の芯材とした石を固定するために、左右の袖にあたる部分をさらに掘り込んでいる。左右の袖部に石を固定した後、大井部として偏平な石を両方に架けて、それを芯として明黄褐色粘土を貼り付けてカマドを構築している。内部から、支脚として転用した菱形土師器の底部が出土した。遺物は住居跡全体から出土しており、特にカマド周辺に集中している。図示できた遺物は、住居跡埋土中出土のものが6点、カマド周辺出土のもの15点の計21点である。1~4は、内面に黒色処理が施されたクロ成形による土師器坏である。3、4は床面近くから出土しており、内面にはヘラミガキ痕、3の底部には回転糸切り痕がみられる。5、6は、土師器甕である。内面ヘラナデ、外面ヘラナデ、ヘラケズリ痕が認められる。5は床面近くから出土し、胴部上半から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がって



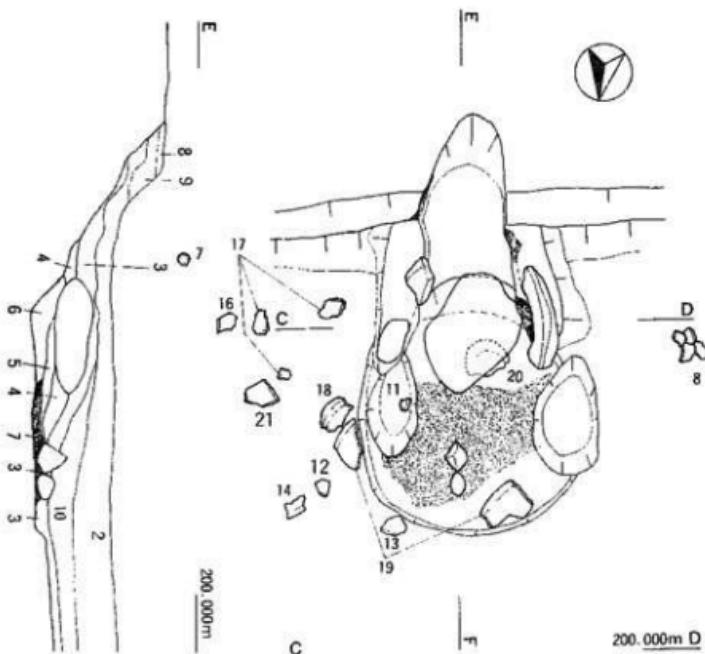
いる。7~21は、カマド周辺出土の遺物である。7はカマド左側の住居跡壁際の埋土から出土しており、底部に粘土紐を積み上げて成形したもので、口径4.4cm、底径4.2cm、器高2.8cm、胸部最大幅6.2cmを測る。胎土には多量の砂粒を含み、内面が灰褐色～桜色、外表面が橙色～にぶい褐色を呈する。8はカマド右側床面から出土しており、胎土に細かい砂粒を多量に含む粘土紐巻き上げ成形による小型の土師器甕である。口径9cm、底径6.3cm、器高6.7cmを測り、内面は黒褐色、外表面は明赤褐色を呈する。9、10はロクロ成形による土師器甕である。9の内面には、黒色処理が施されており、ヘラミガキ痕がみられる。11はカマド内左側袖石の掘り方埋土中から出土した繩



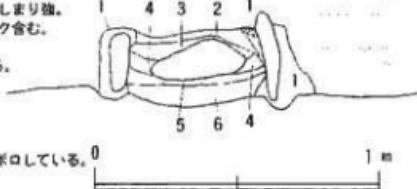
第9図 SI 03 壁穴住居跡貼り床範囲図

羽口である。端部には溶融物が付着している。12~19は、土瓶器窯の口縁部である。内面ヘラナデ、外側ヘラナデ、ヘラケズリ調整がされている。15の外側には、ヘラナデ後に棒状工具痕がみられる。17はカマド左側の埋土中から出土し、胸部の最大径が11.2cm、口径12.4cmを測り、胸部より口縁部が張り出している。20、21は、十師器窯の底部である。20はカマドの支脚に転用されたもので、カマド燃焼部中央、天井部の芯材として利用された偏平な石の下から出土している。内面は、橙色～にぶい褐色、外側はにぶい褐色～灰黄褐色を呈し、底径9cmを測る。

SI 03壁穴住居跡(第13・14図、図版4)

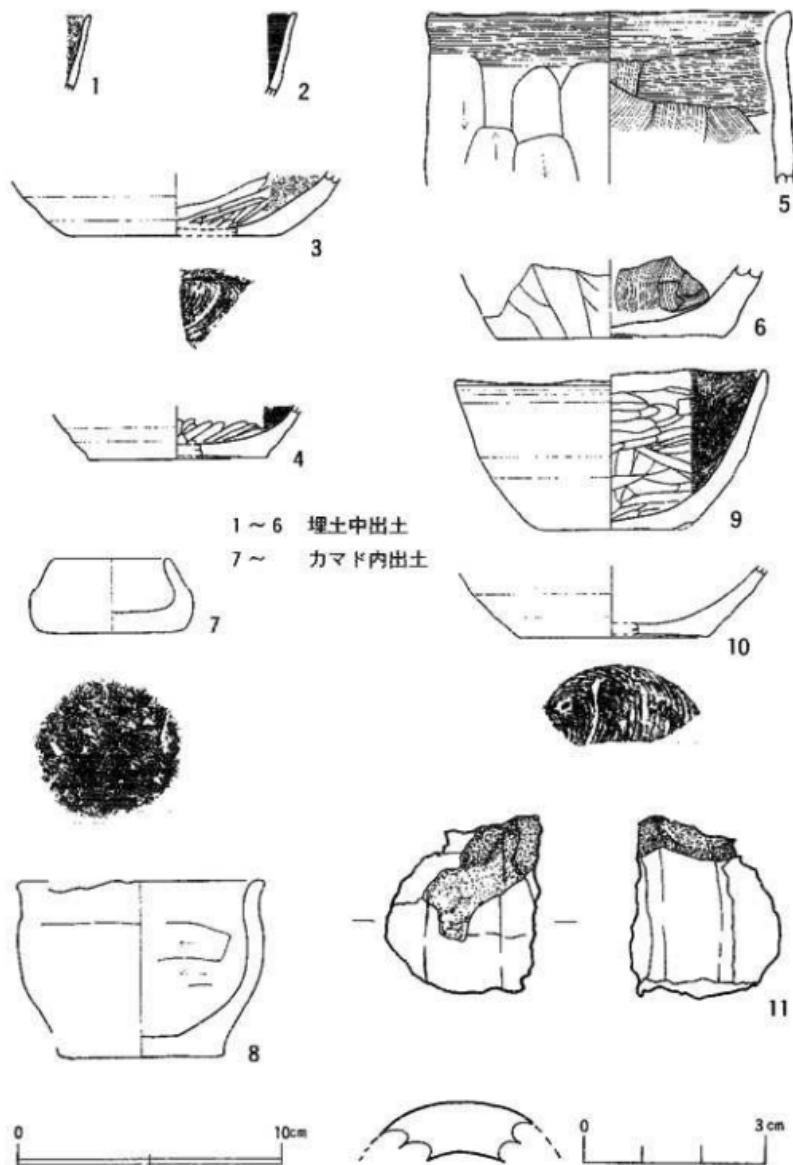


1. 明黄褐色土(10YR6/8) 粘部粘土。
2. にびい黄褐色土(10YR5/4) 地山粒子混入。粘性しまり強。
3. 褐色土(10YR4/4) 炭化物若干混入、地山ブロック含む。
4. 明黄褐色土(7.5YR6/6) 焼土粒子混入。
5. 明赤褐色土(2.5YR5/8) 非常に堅くしまっている。
6. 黄褐色土(10YR5/6) 粘性、しまり強。
7. 赤色土(10R5/8) 燃焼部分。
8. 褐色土(10YR4/4) 地山粒子混入。
9. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土、粘土粒子混入。
10. にびい黄褐色土(10YR4/3) 粘土粒子混入。ボロボロしている。

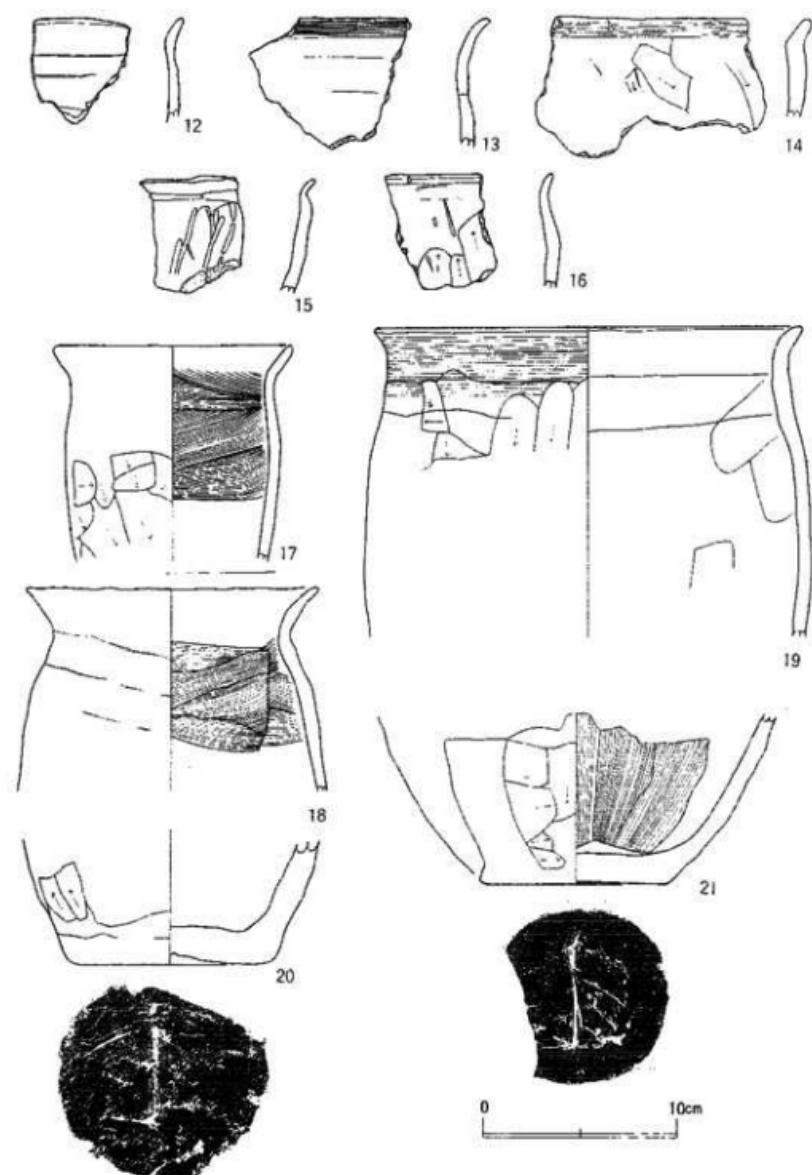


第10図 SI02堅穴住居跡カマド実測図

LT48グリッドに検出された。SI01・02堅穴住居跡より新しく、北東側の壁がSK08土坑によって切られている。規模は、東側228cm、南側180cm、西側218cm、北側165cmである。プラン確認面から床面までの深さは、東側31cm、南側8cm、西側31cm、北側15cmである。埋土は、8層に分層された。SI02堅穴住居跡の床面を約2cm掘り込んで床面としており、非常に良くしまっている。柱穴は、3本検出された。図示できた遺物は5点である。いずれも埋土中に浮いた状態で出土している。1~3は、ロクロ成形による土師器壺の口縁部、4、5は須恵器甕の胸部である。4、5の外



第11図 S102 穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)



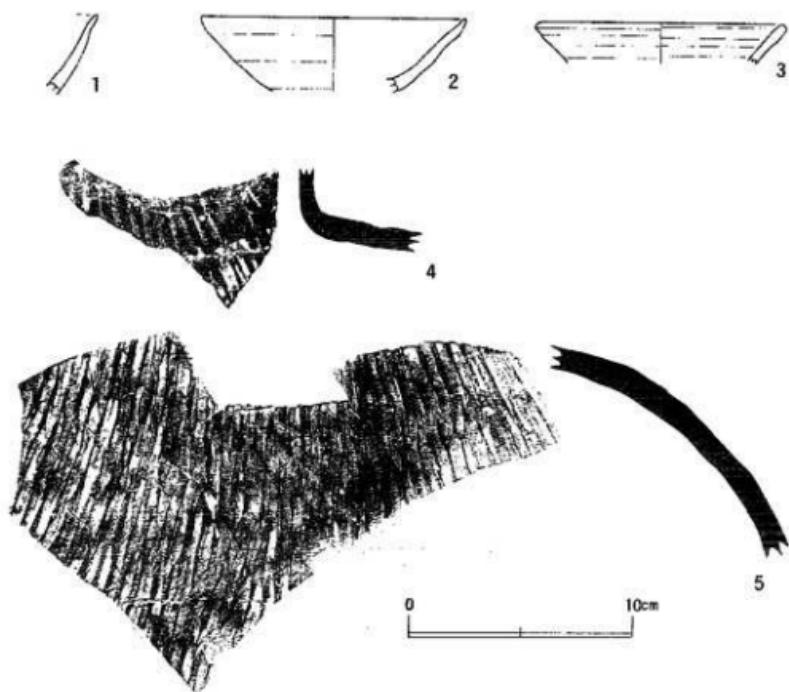
第12図 S102 穹穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)



面には板状工具によるタタキ目がみられ、内面には當て具痕が残っている。色調は、内面が浅黄橙色、外側がにぶい黄橙色を呈する。

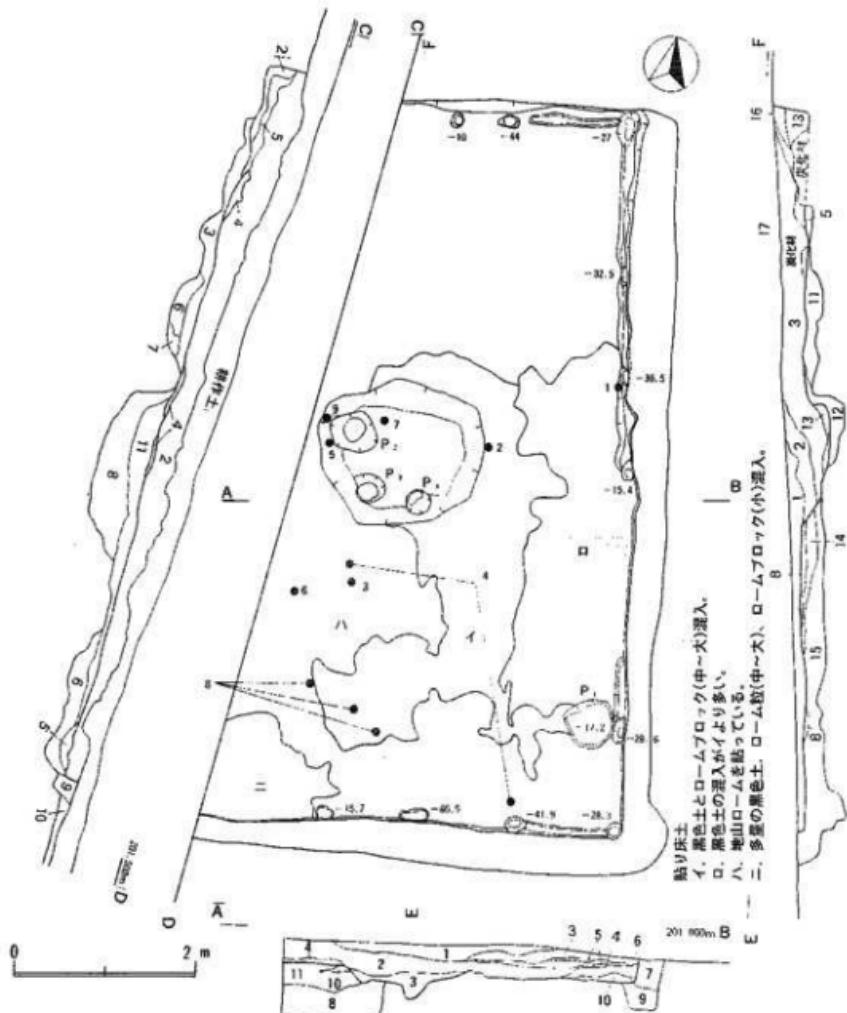
SI06壁穴住居跡(第15~19図、図版5・6・14)

MA63・64グリッドで検出され、今回調査された遺構の中で最も北に位置する。本遺構の西側は調査区域外にかかっているため、調査されたのはその一部にすぎない。確認面は、地山面であった。プラン確認の時点で炭化材や焼土粒が検出されたため、焼失家屋であることが明らか

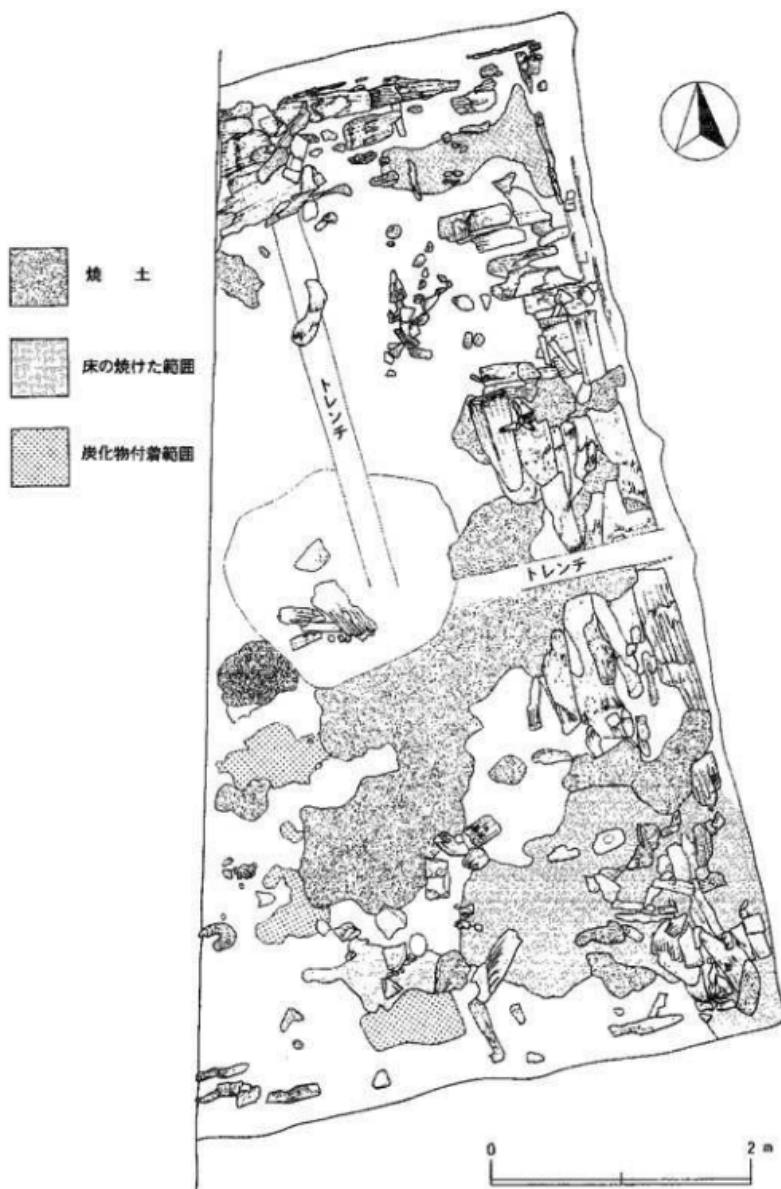


第14図 SI 03 竪穴住居跡出土遺物実測図・拓影図

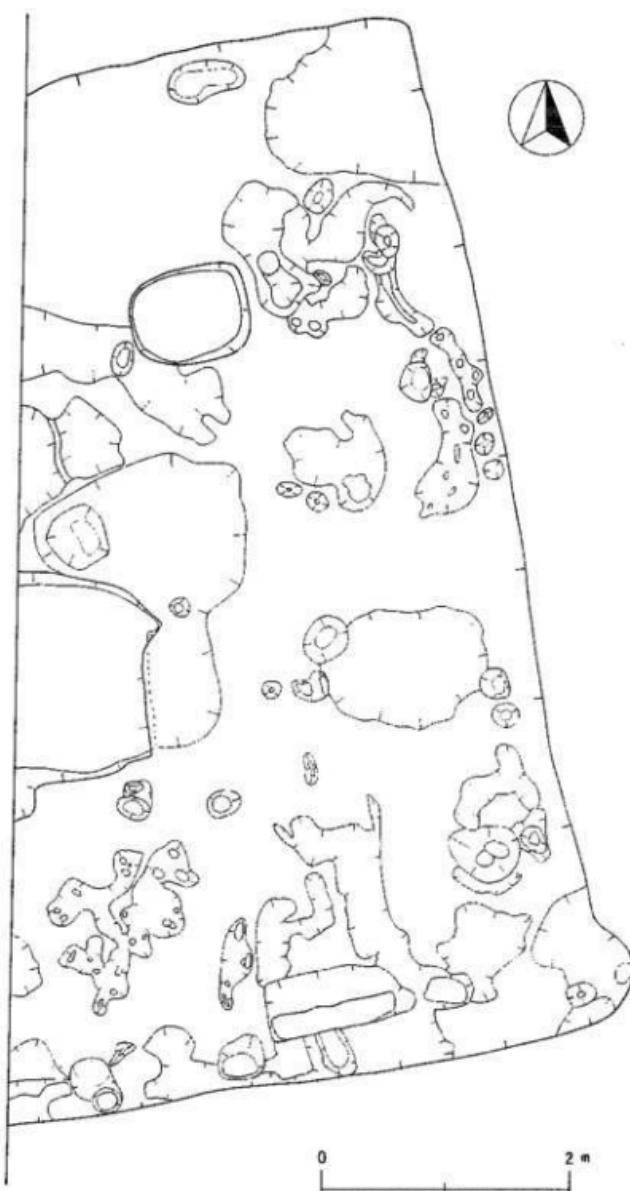
かになった。規模は、北側壁が270cm、東側壁が800cm、南側壁は450cmである。確認面から床面までの深さは、8.1~47cmである。プラン確認を行ったとき、本遺構よりひとまわり大きいプランを確認したため、重複関係にある竪穴住居跡であろうと推定された。調査を進めたところ、床面と考えられる面が観察されず、粗く掘った後埋めもどされた痕跡のみが観察された。このため、ひとまわり大きいプランは、本遺構と異なる別の遺構ではなく、本遺構をつくるにあたって掘り込んだもので、途中でプランを縮小した結果重複関係にあると推定されたものである。一旦埋めもどして壁としていることから、東側と南側の壁はやや軟弱であった。北側の壁については、当初の掘り込みをそのまま利用して壁としているため、他の壁に比較すればしっかりしていた。床面は、黒色土と地山のロームないしはロームブロックを混ぜた土で、全面にわたって貼り床がなされていた。柱穴は、南東隅と北東隅に各1本、南壁際に3本、東壁際に4本、北壁間に2本の合計11本検出された。住居中央調査境界寄りに貯蔵穴と思われる不整形の掘り込みを検出した。179×160cm、深さ約36cmの規模を有する。この他に、貯蔵穴の中にビ



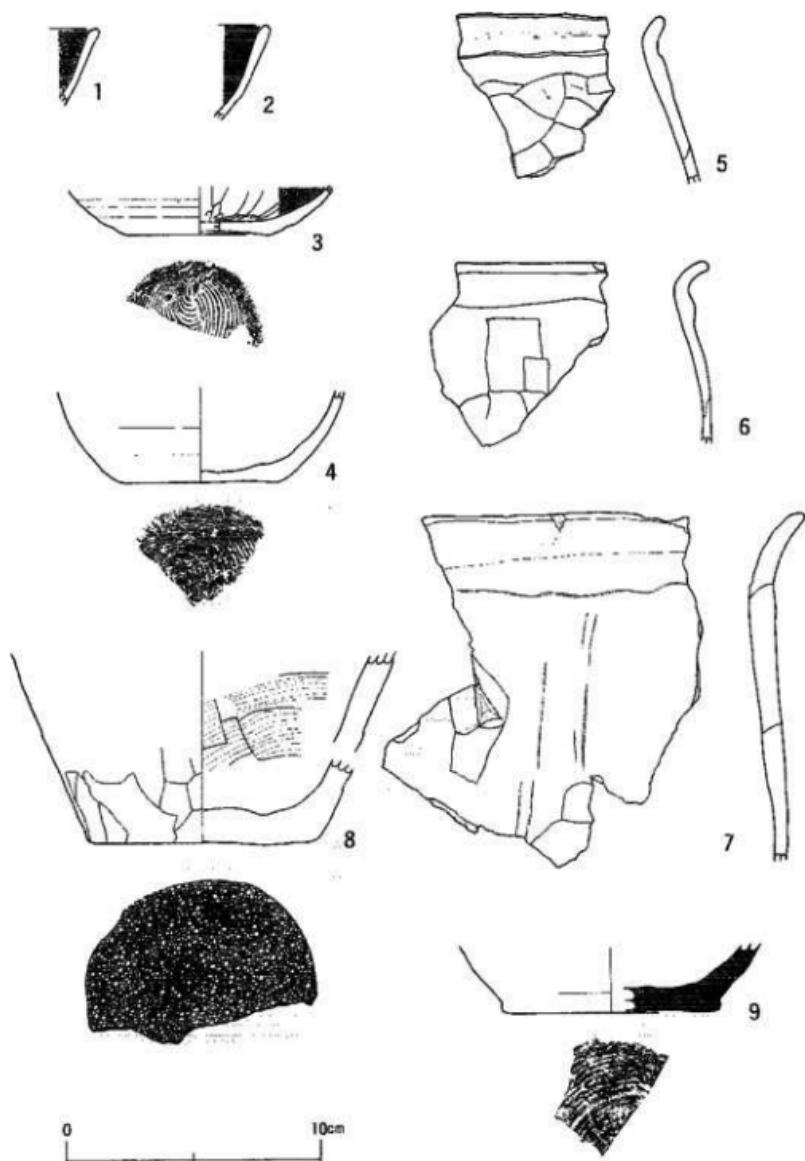
第15図 S106 積穴住居跡実測図



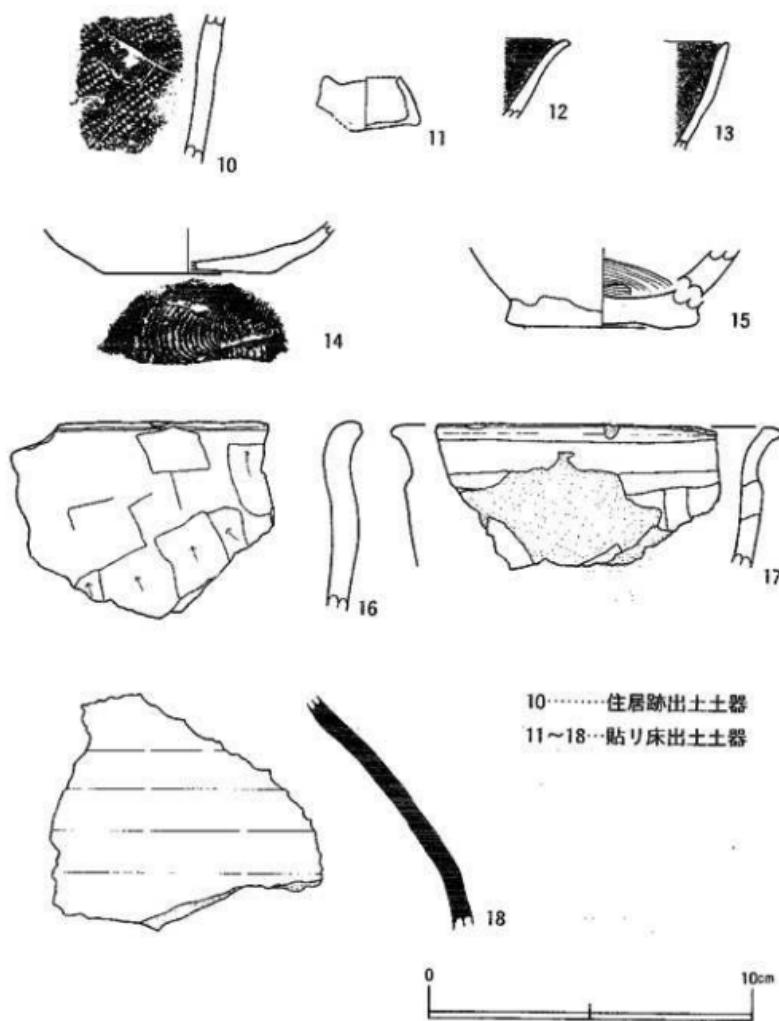
第16図 S106 竪穴住居跡・焼土・炭化材出土状況図



第17図 S106 壁穴住居跡・掘り方実測図



第18図 S106堅穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)



第19図 S106堅穴住居跡出土物実測図・拓影図(2)

トを3($P_2 \sim P_4$)、南東隅寄りにピットを1(P_1)検出した。それぞれの規模は、 P_1 : 57×54cm、深さ約17cm。 P_2 : 46×55cm、深さ約50cm。 P_3 : 32×40cm、深さ約41cm。 P_4 : 27×28cm、深さ約63cmである。カマドは、検出されなかった。また、床面に炭化した板材が多数残っており、東側と北側の壁付近からは、腰板と思われる板材がやや内傾した状態で出土した。遺物は、

土師器壺、土師器甕等の破片23点が出土した。このうち数点を除いては、埋土中に浮いた状態で出土している。1~4は土師器壺である。1~3は内面が磨かれており、黒色処理が施されている。4は、RP9とRP14が接合したもので、床面近くから出土している。内面には煤が付着している。11~18は、貼り床中から出土したものである。11は、手捏土器である。底部に粗いケズリがなされているが、ケズリすぎて器厚が薄くなっているため、焼成後に一部欠失している。12、13は土師器壺で、内面が黒色処理されている。18は、須恵器壺の破片である。

(2) 土 坑

SK05土坑(第20・21図、図版7)

MA63、LT63グリッド内の黒褐色土(N層)中に大湯浮石が流れ込んでいたため、プランを確認することができた。西側の一部は、範囲確認時のトレソチによって失われていた。規模は、推定で112×133cm、深さ15~23cmを測る。掘り込みは、地山漸移層から地山上面にかけて及んでおり、壁はN層の黒褐色土である。遺物は、土師器壺、土師器甕などの破片が大湯浮石中から集中して出土した。2は、内面が黒色処理された土師器壺である。接合できなかったが、胎土・焼成等から同一個体と判断された。5は、推定の口径が14.2cm、底径7.7cm、器高12.4~13.4cmの小型の土師器甕である。外面にヘラケズリの後、粗いナデが全面になされている。6は、輪積み痕の明瞭に残る小型の土師器甕である。外面の調整はヘラケズリ、内面は横位のヘラナデが施されている。口径14.8cm、底径9.6cm、器高16.2cm(いずれも推定)を測る。口縁部内側に煤状炭化物が付着している。

SK03土坑(第22図、図版7)

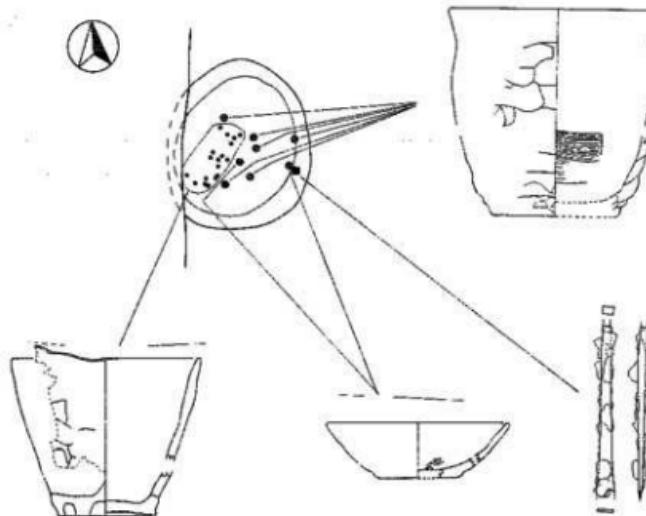
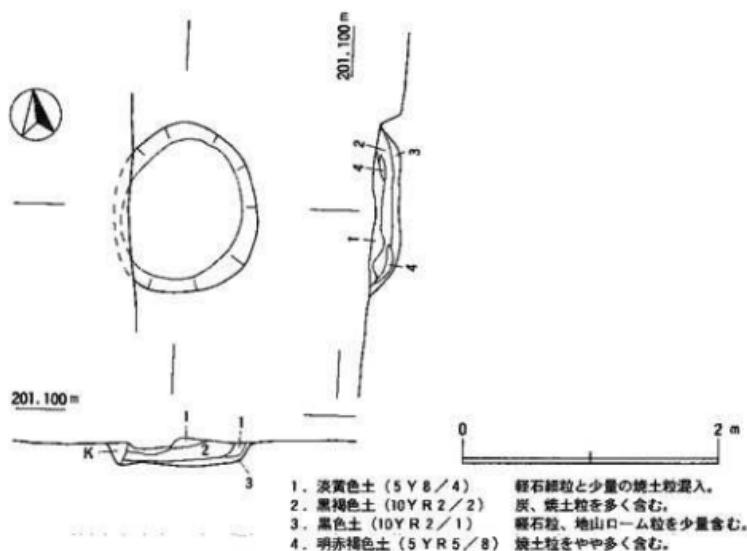
MA46、LT46グリッド内の地山面で検出された。プラン確認時に掘りすぎて、上部を削平してしまった。144×100cmの方形の平面プランを呈する。深さは、比較的遺存状態のよい東側で20~22cm、西寄りで8~10cmである。固化できなかったが、底面から土師器甕の破片が1点出土した。

SK08土坑(第22図)

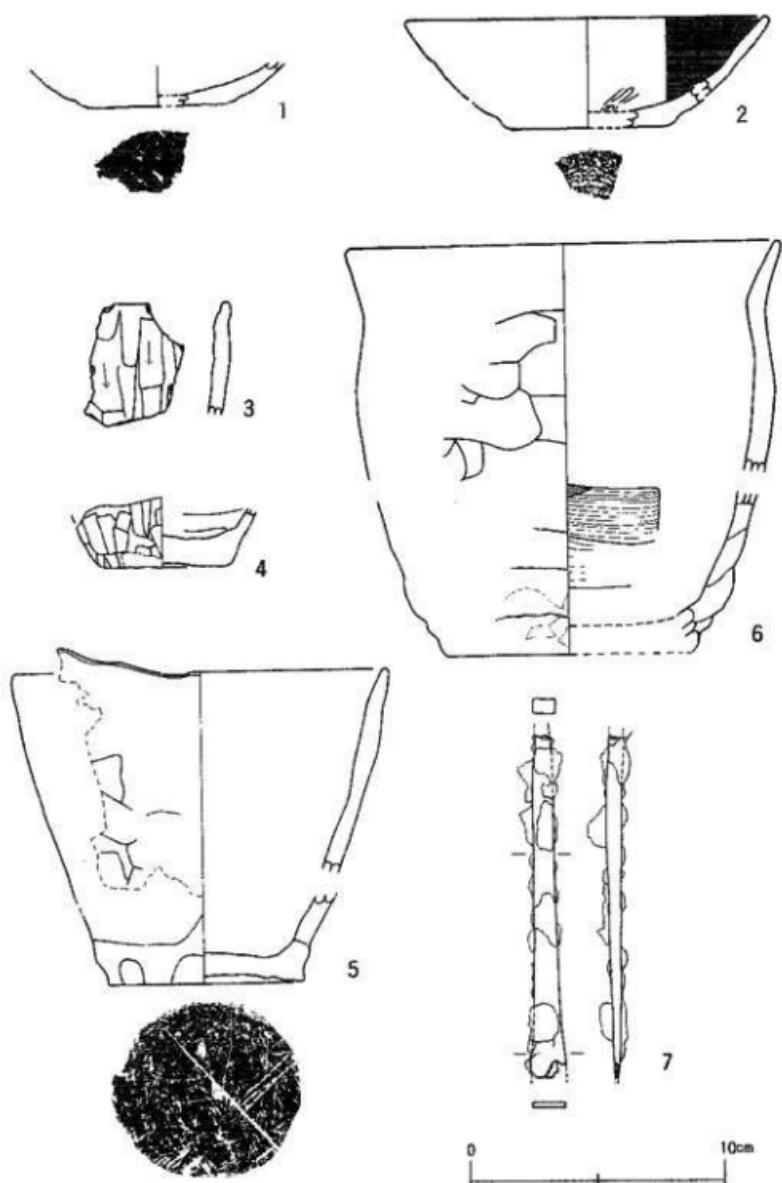
LT48グリッド地山面でプランを確認した。SI03竪穴住居跡が廃棄された後につくられていることが、埋土中に軽石粒が多量に含まれていたことから判別できた。平面形は、橢円形を呈する。規模は、170×114cm、確認面からの深さ15~17cmである。掘り込みは、地山まで達しておらず、SI01竪穴住居跡とSI03竪穴住居跡の埋土中で完結している。底面はほぼ平坦、壁は南側の壁を除いてゆるい角度で立ち上がっている。遺物は、固化できなかったが、土師器甕の破片3点が出土した。

SK10土坑(第22図、図版7)

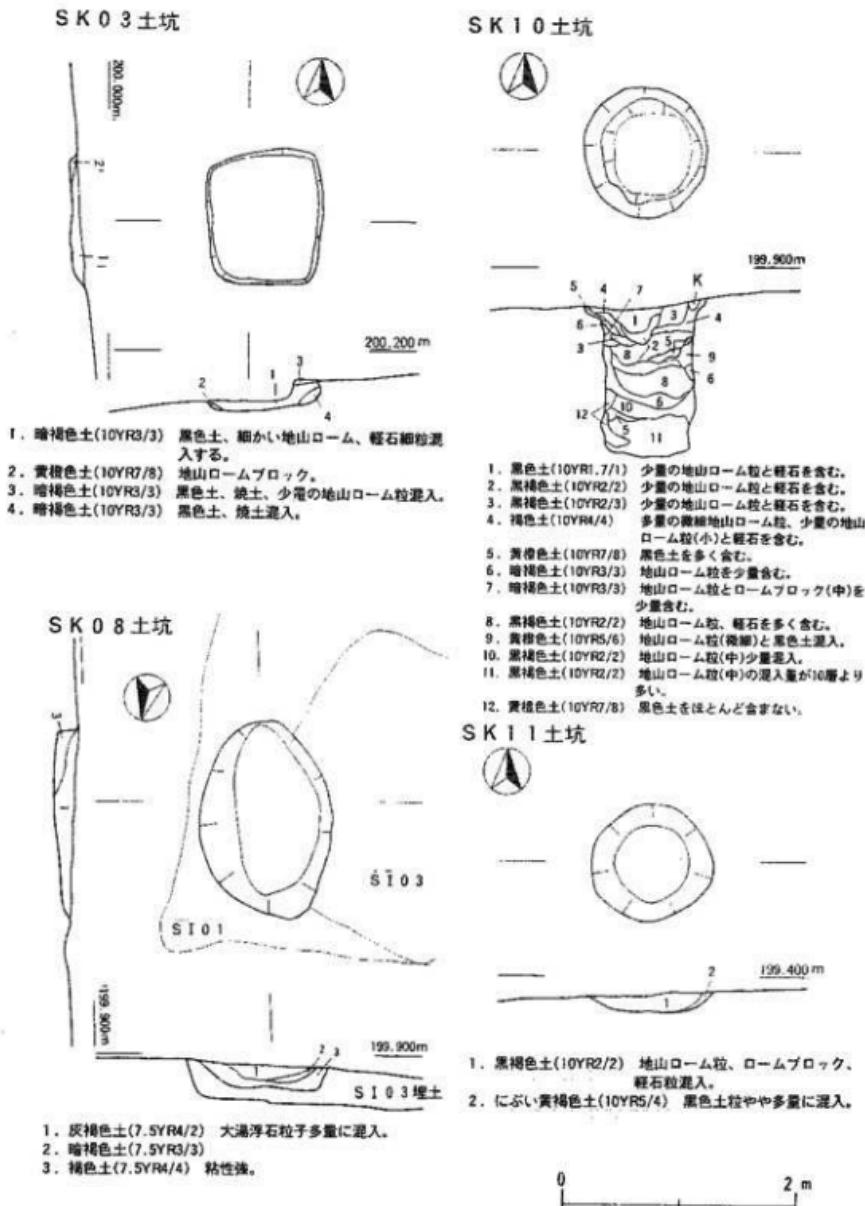
MA53、MB53グリッドの境界線上に位置する。地山面でプランを確認した。直径105~113c



第20図 SK05 土坑実測図



第21図 SK 05土坑出土遺物実測図



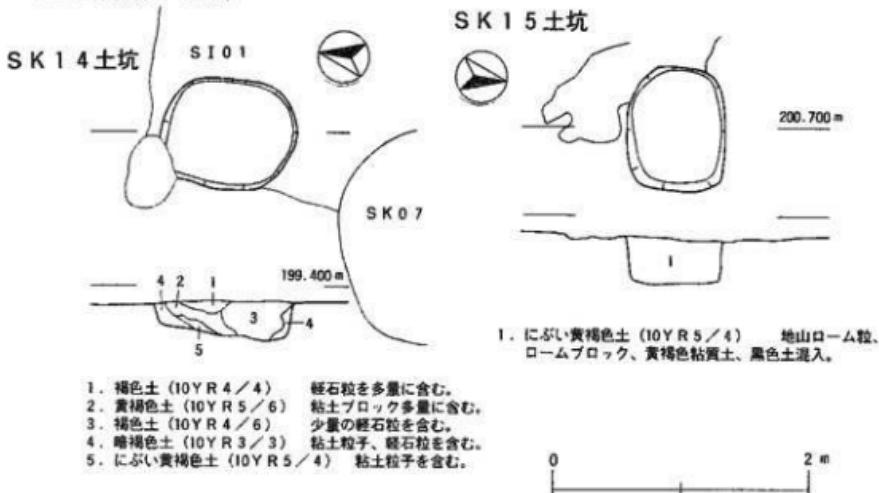
第22図 SK03・SK08・SK10・SK11土坑実測図

mのはば円形のプランを呈する。確認面からの深さ125~132cmを測る。ほぼ平坦な底面から立ち上がる壁は、崩落した箇所が若干観察される。遺物は出土しなかった。

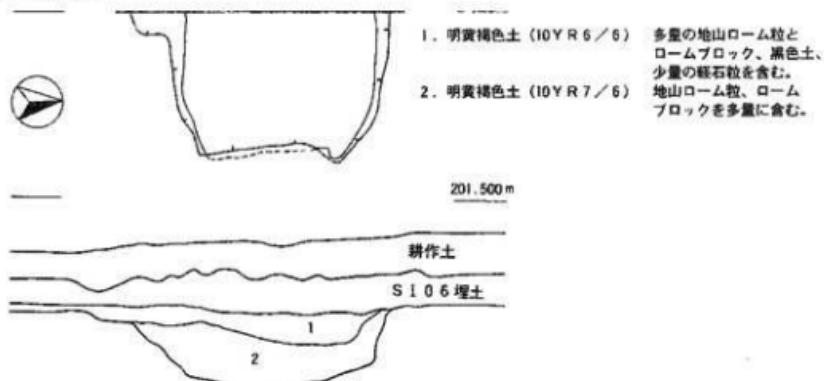
SK11土坑(第22図、図版2)

M A54グリッド地山面でプランを確認した。SK10土坑と本遺構の位置関係は、SK10土坑の北東235cmに本遺構が位置する。直径102~105cmのはば円形で、確認面からの深さは、11~18cmを測る。壁は、比較的ゆるやかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

SK14土坑(第23・24図)

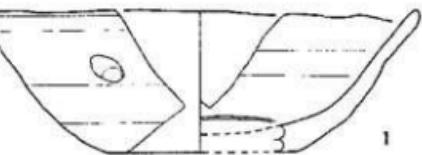


SK16土坑

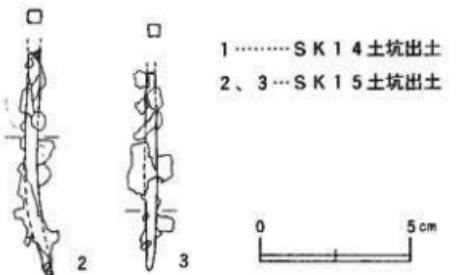


第23図 SK14・SK15・SK16土坑実測図

MA48グリッドで検出した。SI01堅穴住居跡の貼り床を除去中にプランを確認した。SI01堅穴住居跡をつくる時に、上部を削平し、北東隅の部分を壊している。長軸104cm、短軸88cmの隅丸方形の平面形を呈する。確認面からの深さは、17~30cmを測る。底面は、北から南に向かってゆるやかに傾斜している。壁は、やや急に立ち上がる。出土遺物は、土師器壺の破片1点である。口径14.4cm、底径6.3cm、器高4.7cm(いずれも推定)を測る。胎土に小砂粒を含む。指頭で押されてついたと思われるくぼみが明瞭に残っている。



1 SK14 土坑出土
2, 3 ... SK15 土坑出土



第24図 SK14・SK15土坑出土遺物実測図

SK15土坑(第23・24図、図版16)

SI06堅穴住居跡の貼り床を除去する時に検出された。MA64とMB64グリッドの境界線上に位置する。長軸95cm、短軸77cmの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは、32~34cmを測る。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、釘と思われる鉄製品である。2、3とも上部を欠失している。残存している部分の長さは、2が7.5cm、3が6.6cm。断面は、いずれも4×4mmの方形を呈する。

SK16土坑(第23図)

SK15土坑と同様に、SI06堅穴住居跡の貼り床を除去する際に検出された。MB63グリッドに位置する。本遺構の西側は、調査区域外にかかっている。調査ができた部分の規模は、北側の壁が117cm、東側の壁が110cm、南側の壁が112cmを測る。深さは、42~55cmである。底面は平坦でなく、中央部がくぼむ皿状を呈している。遺物は出土しなかった。

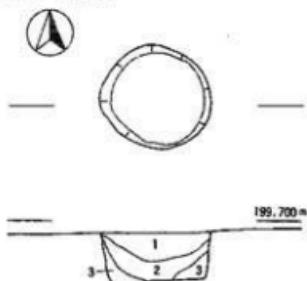
3 時期不明の遺構

時期不明の遺構としては、土坑8基を検出した。検出位置は、調査区の南側に片寄っている。

SK01土坑(第25図、図版7)

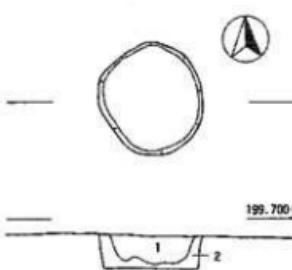
LT55グリッドとMA55グリッドにまたがって検出された。確認面は、地山漸移層中である。直径92~97cmのほぼ円形のプランを呈する。地山面からの深さは、40~44cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

SK 01 土坑



1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ローム粒子混入。
2. 暗褐色土(7.5YR2/2) 地山ローム粒子混入。しまりやや良い。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 地山ローム粒子多量に混入。
しまりやや良い。

SK 02 土坑



1. 黒褐色土(7.5YR2/2) 地山ローム粒子混入。
2. 褐色土(7.5YR4/3) 地山ローム粒子全体に均一に混入。
しまりやや良い。

SK 04 土坑



1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 地山ローム粒少量混入。
2. にぶい黄褐色土(10YR8/8) 地山ローム粒、黒色土混入。
3. 黄褐色土(10YR8/8) 地山ローム粒。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4)

SK 06 土坑



1. 黒褐色土(10YR3/2) 黒褐色土、ロームブロック、白色粘土ブロック(小)、少量の炭を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 黒褐色土、ローム粒を含む。
3. 明黄褐色土(10YR6/8) 黒色土少量混入。



第25図 SK 01・SK 02・SK 04・SK 06 土坑実測図

第4章 調査の記録

SK02土坑(第25図、図版7)

SK01土坑の北西約350cmのMA56グリッド内に位置する。確認面は、SK01土坑と同様に地山漸移層中である。直径88~99cmのはば円形で、地山面からの深さは28~30cmである。底面はほぼ平坦であるが、壁の立ち上がりは急である。遺物は出土しなかった。

SK04土坑(第25図)

MΔ46グリッド内の地山面でプランを確認した。平面形は不整形で、南北方向で147cm、東西方向で105cmを測る。地山面からの深さは、10~27cmである。底面は平坦でなく、凹凸がある。遺物は出土しなかった。

SK06土坑(第25図、図版7)

LT46グリッド地山面で検出した。平面形は方形を呈し、94~140cmの規模を有する。深さは、6~14cmを測る。底面は、ほぼ平坦である。壁は北側がやや急角度で立ち上がるが、その他の壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

SK07土坑(第26図)

MA47、MA48グリッドにまたがって検出された。SI01竪穴住居跡の精査中に地山面でプランを確認した。東側半分は、SI01竪穴住居跡の貼り床の土によって埋められていた。直径167~172cmの不整形形を呈し、深さ9~34cmを測る。壁は、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。底面は、凹凸が著しい。遺物は出土しなかった。

SK09土坑(第26図)

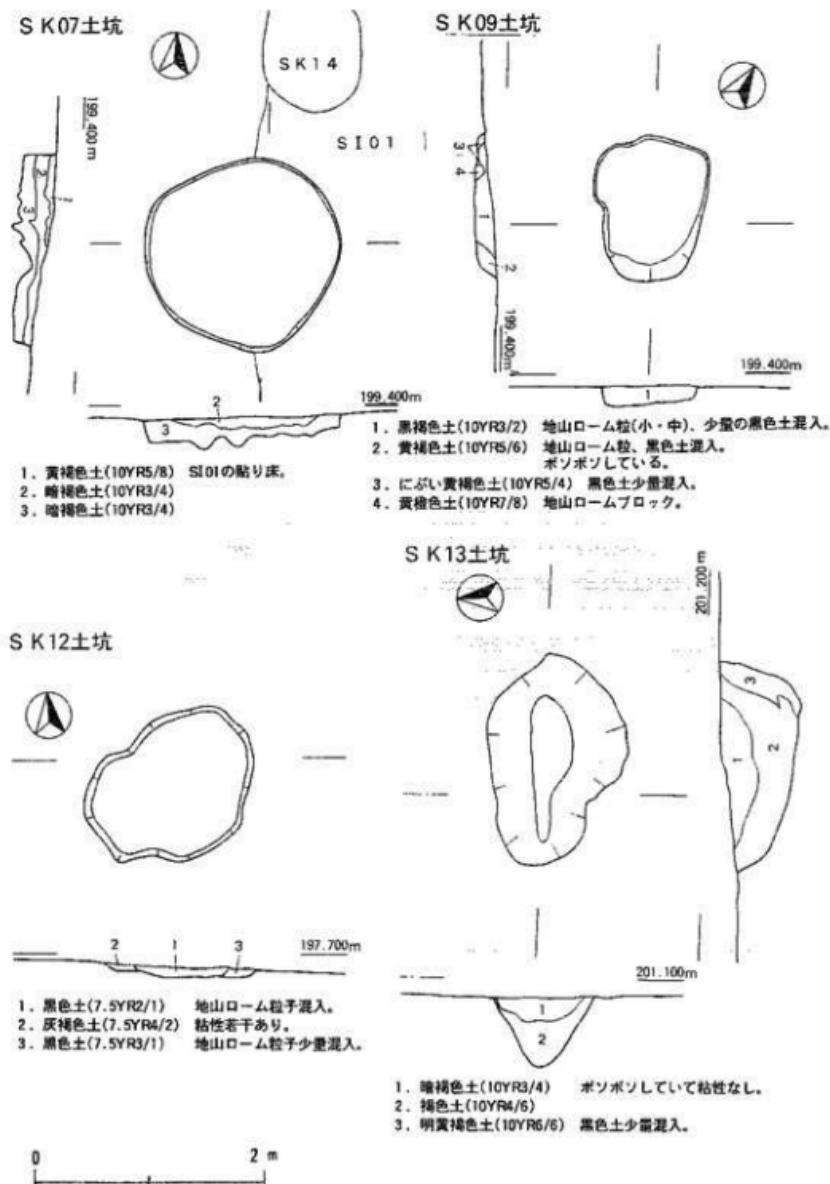
MA48グリッド内の地山面でプランを確認した。平面形は、不整形を呈する。北西側壁で106cm、南西側の壁で129cm、南東側壁で85cm、北東側の壁で120cmを測る。深さは、5~18cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁は、南東から南側にかけての壁がややゆるやかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

SK12土坑(第26図)

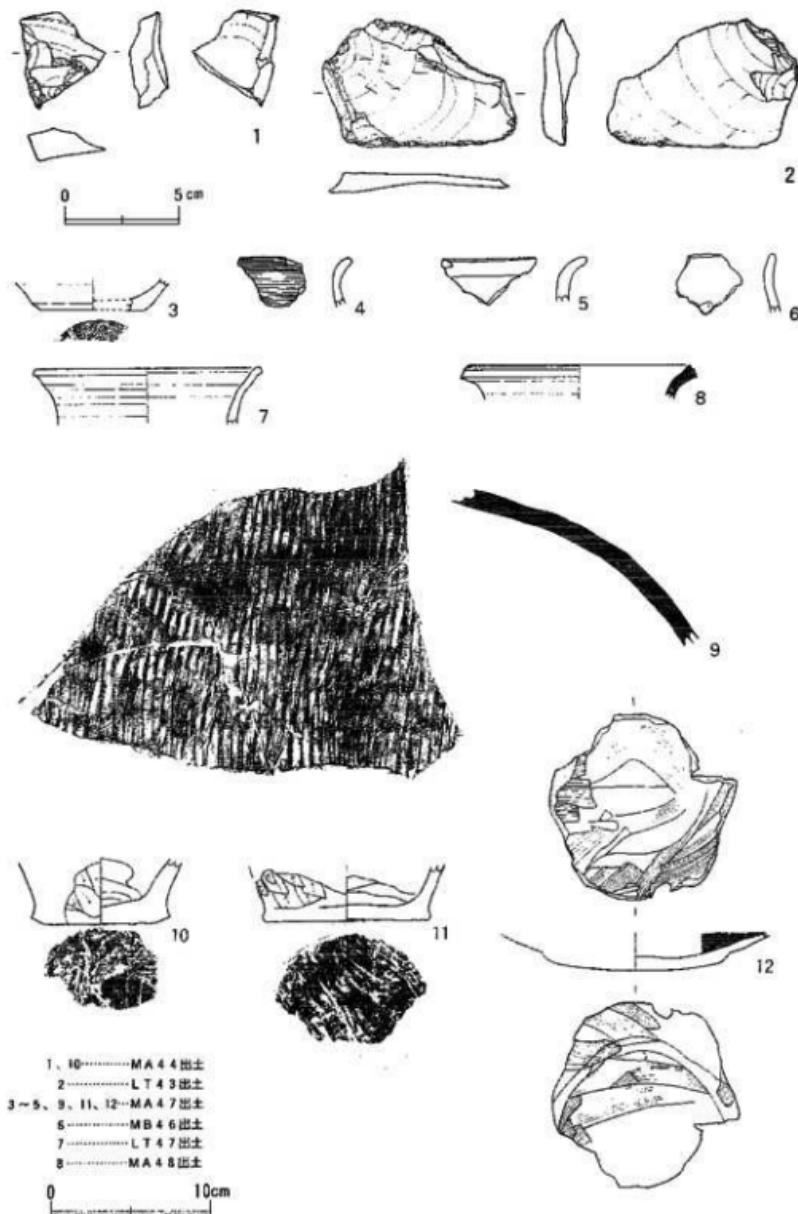
LS50グリッドとLT50グリッドの境界線上に位置する。プラン確認面は、地山面である。平面形は不整形を呈し、118×157cmの規模を有する。深さは、6~10cmを測る。底面は、ゆるい起伏が認められる。遺物は出土しなかった。

SK13土坑(第26図)

LS42グリッドとLT42グリッドにまたがって検出された。検出された遺構の中で、最も南に位置する。プラン確認面は、地山面である。平面形は不整形で、南北121cm、東西184cmの規模を有する。確認面からの深さは、31~70cmを測る。底面は、西から東に向かって傾斜している。遺物は出土しなかった。



第26図 SK07・SK09・SK12・SK13土坑実測図



第27図 通構外出土遺物実測図・拓影図

第2節 遺構外出土遺物（第27図）

遺構外出土遺物は、南北に長い調査区の南側に偏在している。すなわち、43ラインから50ラインの間で大部分が出土している。遺物としては、石器剝片、縄文土器、土師器、須恵器であるが、そのほとんどが破片で、しかも小破片のものが多い。単純に点数だけをあげると、石器剝片2点、縄文土器8点、土師器38点、須恵器12点という内訳になる。3は、土師器坏の底部資料である。ロクロを用いて成形しているが、外面の底部付近にはケズリ調整を施している。9は、須恵器壺の胴部片で、7点が接合したものである。内面全体にナデ状の調整が認められる。また、外面に煤が付着しており、内面は剥落が観察される。12は、MA47グリッド出土の土師器坏である。胎土には、砂粒と鉄滓と思われる酸化鉄が少量含まれている。丸底風の底部から段がついて口縁部へとやや開きぎみに立ち上がる。底部の作り出しさはやや雑で、きれいな円を描かない。調整は、内外面ともヘラナデである。内面は、黒色処理が施されている。底径は、10.8cmである。これら遺物の出土グリッドと遺構配置の関係をみると、SI01～03堅穴住居跡と土坑群があるLT46・47、MA46～48グリッドからの出土数が比較的多く、そこから南西側にゆるく傾斜している等高線に沿って分布しているのがわかる。

第5章 まと め

本遺跡で検出・出土した遺構と遺物について、若干のまとめと問題点を述べてみたい。

縄文時代

竪穴遺構と出土遺物について

今回の調査では、本遺構の性格を明らかにできるような資料を得ることはできなかった。ここでは、本遺構の特徴と出土遺物について述べたい。^① 楕円形のプランで一度掘り下げたあと、さらに円形に2段の掘り込みを有する。^② 底部の中央にピットを有する。^③ 壁外柱穴を有する。^④ 埋土中に焼土層が観察される。^⑤ 遺物のはほとんどは、焼土層から上で出土している。^①～^③は、本遺構の形態上の特徴ということができ、^④と^⑤は、本遺構の廃棄された時の特徴ということができる。

^①については、椭円形のプランと円形のプランの別遺構同士の重複の結果と解釈できなくもない。この点について、埋土の堆積状況をみると、時期差のある堆積というよりも、一つの落ち込みの中に土が流れ込んだ状況を呈しており、本遺構が単独の遺構であるとすることができる。^②と^③については、本遺構の上屋の構造を考える上で手がかりになるものと思われる。

本遺構から出土した縄文土器は、口縁部資料から3個体数えられた。いずれも鉢形の器形である。地文のみで口縁部を磨消すものと、頸部に平行沈線文を主体とするものとがある。縄文時代晩期後半、大洞C式に比定される。

平安時代

竪穴住居跡について

検出できた4軒の竪穴住居跡について、A:規模 B:柱穴配置 C:カマド D:床面と壁溝 E:埋土の5点から分析してみたい。

A:規模 次の3つに分けることができる。A-1 方形を呈する比較的大型の竪穴住居跡で、01と06がこのグループである。床面積は、01が約38m²、06の調査部分が約27m²で全体では推定で50m²前後である。A-2 方形を呈し中規模の竪穴住居跡で、02が相当する。床面積は約23m²である。A-3 方形を呈し小規模の竪穴住居跡で、03が相当する。床面積は約3.9m²である。

B:柱穴配置 3つのグループに分けることができる。B-1 柱穴が各隅部に配され、各壁に沿ってさらに2ないし5本の柱穴をもつグループで、01と06である。B-2 4本の主柱穴が配されるものであるが、カマドのそばの柱穴以外の3本が壁により片寄って配置される竪穴住居跡で、02が相当する。B-3 柱穴の配置に規則性のみられない竪穴住居跡で、03が相当す

る。

C:カマド 4軒の竪穴住居跡のうちカマドが付設されていたのは02で、03には付設されていなかった。01については、02と重複しており、02がつくられた時に埋された可能性が考えられる。また、06については検出されなかったが、遺構の半分近くが調査区域外にあるため、付設の有無は不明である。

D:床面と壁溝 貼り床がなされているかどうかと壁溝の有無によって、次のように分けられる。D-1 貼り床が一部なされていて壁溝がないもので、01が相当する。D-2 全面にわたり貼り床がなされていて壁溝がないもので、02が相当する。D-3 全面に貼り床がなされていて壁溝が一部観察されるもので、06が相当する。D-4 貼り床も壁溝もないもので、03が相当する。

E:埋土 埋土の中に大湯浮石が含まれているかどうかによって、次のように分けられる。E-1 大湯浮石が流れ込んで層としてとらえられるもので、これに相当する住居跡はなかった。E-2 大湯浮石特有の軽石が霜降り状に含まれているもので、01,02,03,06のすべての住居跡が相当する。

以上5つの視点からみた結果として相関関係を求めるとき、規模A-1と柱穴配置B-1および埋土E-2の関係が認められる。この結果、01と06の相関が強いことがわかる。SI01,02,03の各竪穴住居跡に関しては、SI01→SI02→SI03という新旧関係がとらえられているので、SI01とSI06の相関が強いとすると、SI01とSI06がほぼ同時存在と推定でき、4軒の住居跡の変遷が一応跡づけされることになる。

焼失家屋について

4軒の竪穴住居跡のうち、炭化材が出土したのはSI01,02,06の3軒である。このうち出土量が多く、比較的遺存状態がよかつたのは、SI06であった。地山面まで下げて本遺構のプランを確認した時には、壁板と思われる板材が東側と北側の壁際に観察され、本遺構が焼失家屋であることが容易に判別できた。埋土を取り除いていたところ、壁板がやや内傾しており、その下の床面に板材が出土し始めた。この板材は、壁に沿って平行にすき間なくならべられており、床に密着していたことから、敷かれていたことが推定される。遺存のよい板材は、幅28~30cm、長さ75cm前後を測る。板材の確認される範囲は、壁際から45~110cmであり、住居中央部からは確認されない。全体を調査できたわけではないので断定はできないが、貯蔵穴を含めた中央部と壁際の板敷き部分とで使われ方に区別があったのではないかと想像される。類例としては、下乳牛遺跡SI 01竪穴住居跡と能代市上の山II遺跡SI 18竪穴住居地跡の例が上げられる。下乳牛遺跡の場合は、敷き板材を水平に固定するための根太が出土しているが、本住居跡からは根太は出土していない。上の山II遺跡の場合は、腰板が内側に倒れ込んだという解釈と

敷板とする解釈を掲げ可能性を指摘するに留めている。

また、本住居跡は焼失によって廃棄されたのであるが、土器等の出土遺物が少ないとから、火事になつても生活用具を持ち出す余裕があつたのか、運び去つてから故意に火を放ったかのどちらかが想定される。

遺構の新旧関係について

遺構の切り合いのほかに、切り合い関係にない場合でも埋土から新旧関係がある程度推定できた。

調査区南側に位置する遺構については、SK07、SK14がSI01に、SI01がSI02に、SI02がSI03に、SI03がSK08にそれぞれ切られている。SK07とSK14は、前者に大湯浮石に特有の軽石の混入がみられず、後者にのみみられたことから、SK07はSK14よりも古い時期のものであることが推定された。のことから次のような関係がわかる。

SK07→SK14→SI01→SI02→SI03→SK08 <1>

調査区北側に位置する遺構については、SK15、SK16がSI06によって埋められている。SI06とSK05との関係は、攪乱があいだに入つて不明であったが、埋土によって次のように推定できた。SK05の埋土上面に大湯浮石が層をなして入つていて、大湯浮石降下後それほど時間を経ない時期にSK05が廃棄されたことが推定される。一方、SI06の埋土中には、軽石が霜降り状に含まれていたことから、SI06が廃棄されたのは、大湯浮石降下後ある程度時間を経た時期と考えることができる。以上のことから、次のように新旧関係を推定できる。

SK05→SK15、SK16→SI06 <2>

先ほどの竪穴住居跡の分析から、SI01とSI06の相関関係が認められる。これと、<1>、<2>から次のような新旧関係を想定できる。

SK07→SK14→SI01→SI02→SI03→SK08

⋮

SK05→SK15、SK16→SI06

出土遺物について

本遺跡から出土した平安時代の遺物は、土器と鉄製品等である。土器は、須恵器の壺と甕、土師器の壺と甕が出土している。須恵器の土器に占める割合は少なく、ほとんどが土師器である。遺構の変遷から、土器の変遷もとらえられないか試みたものの、明確な時期差を読み取ることはできなかった。ここでは、土師器を中心とした若干の特徴を述べるに留めたい。土師器壺：ロクロ成形で底部切り離しは回転糸切りである。内面に磨きを施した後、黒色処理をしているものが一部にみられる。土師器甕：粘土紐巻き上げ成形で、外面の調整が底部付近にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。巻き上げ痕がかなり明瞭に残っている土器もみられ

る。底部は、砂底、木葉痕を残すもの、ヘラ等で調整しているものがある。器種については、杯、甕のみで、鍋形はみあたらなかった。

最後に、遺構外出土遺物として取り上げた土師器杯(第27図12)であるが、ロクロを使用せず丸底風の底部と体部のあいだに段をもつ点で、他の土師器杯と異なる。遺構内から出土している土師器よりも古い様相を呈し、8世紀後半とされる国分寺下層式に比定されるものと思われる。

おわりに

本遺跡は、繩文時代晚期後半と奈良時代、平安時代に営まれたことがわかった。このうち後者については、堅穴住居跡等の埋土中に軽石を含むことから、10世紀前半とされる大湯浮石噴出以後と推定される。しかしながら、その細かな年代幅の決め手になる資料・手がかりにやや欠けるのは残念である。

註1) 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』秋田県文化財調査報告書第119集 1984(昭和59年)

註2) 秋田県教育委員会『此掛沢II遺跡 上の山II遺跡』秋田県文化財調査報告書第114集 1984(昭和59年)

参考文献

八戸市教育委員会『是川中居・掘田遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第5集 1980(昭和55年)

北上市教育委員会『九年橋遺跡第6次調査報告書』北上市文化財調査報告第29集 1980(昭和55年)

藤村東男「大洞諸型式設定に関する二、三の問題」『考古風土記』第5号 1980(昭和55年)

秋田市教育委員会「湯ノ沢C遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984(昭和59年)

氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14集 1957(昭和32年)

氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『山形県の考古と歴史』1967(昭和42年)

青森県教育委員会『源常平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集 1977(昭和52年)

桑原滋郎「東北地方北部および北海道の所謂第I型式の土師器について」『考古学雑誌』第61巻 第4号 1976(昭和51年)

第5章　まとめ

- 桜田 隆 「底面に砂粒を付着させる變形土師器とその分布範囲について」 日本考古学協会第48回総会研究発表要旨 1982(昭和57年)
- 桜田 隆 「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相(I)」 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第2号 1987(昭和62年)
- 遠藤勝博・相原康二 「岩手県南部(北上川中流域)における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢』 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編 1983(昭和58年)
- 秋田県教育委員会 『堪忍沢遺跡』 秋田県文化財調査報告書第152集 1987(昭和62年)
- 秋田県教育委員会 『太田谷地館跡』 秋田県文化財調査報告書第172集 1988(昭和63年)
- 仙台市教育委員会 『栗遺跡』 仙台市文化財調査報告書第43集 1982(昭和57年)
- 高橋一夫 「集落分析の一視点—入口と集落の道—」『埼玉考古』 1983(昭和58年)
- 秋田県教育委員会 「案内Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI』 秋田県文化財調査報告書第99集 1983(昭和58年)

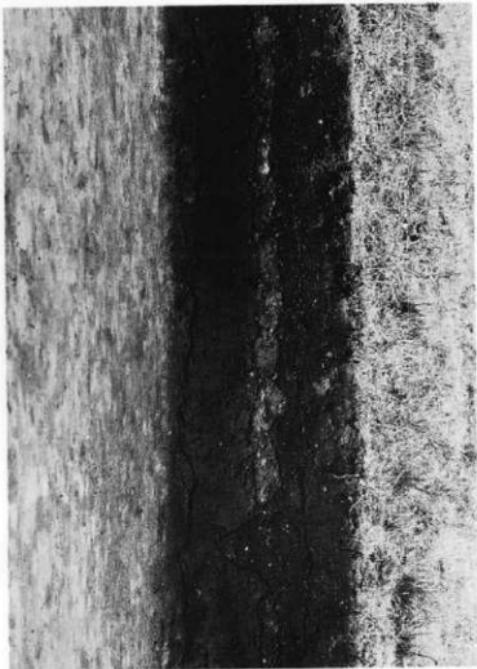


1 遺跡遠景(西から)



2 遺跡近景(北から)

図版
2



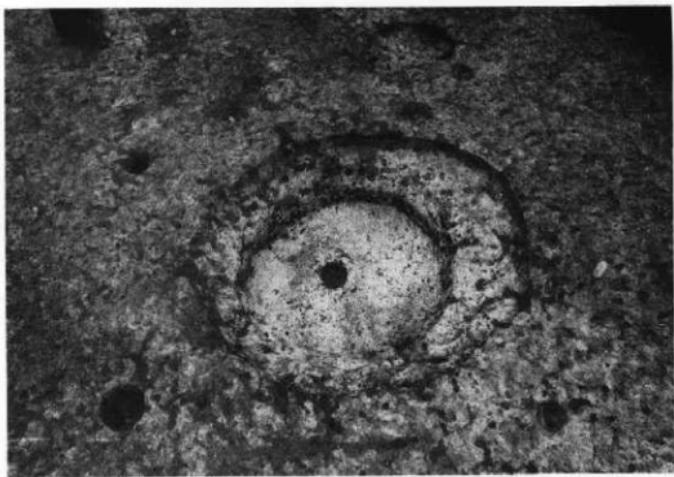
1 基本土層堆積状況(南から)



2 SK101堅穴遺構(中央)-SK11土坑プラン確認状況(南から)



1 SKI 01 壁穴遺構土層堆積状況(南西から)



2 SKI 01 壁穴遺構完掘状況(北から)



1 S I 0 1 • 0 2 • 0 3 整穴住居跡・土坑群プラン確認状況(北から)



2 S I 0 1 • 0 2 • 0 3 整穴住居跡・土坑群実掘状況(北から)



1 SI02 穫穴住居跡カマド遺物出土状況(北から)



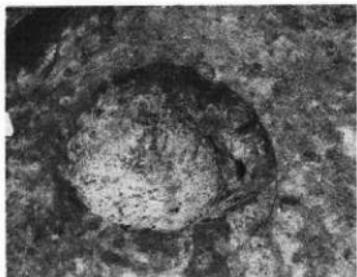
2 SI06 穫穴住居跡プラン確認状況(南から)



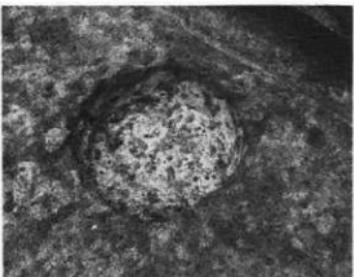
1 S106 堪穴住居跡炭化材出土状況(北から)



2 S106 堪穴住居跡掘り方(北から)



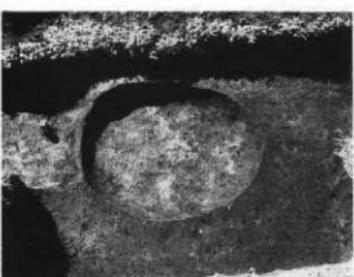
1 SK01 土坑完掘状況(南西から)



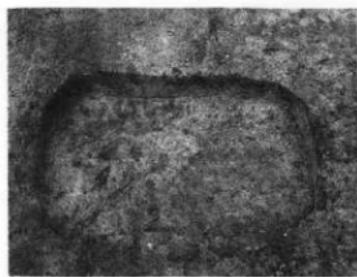
2 SK02 土坑完掘状況(南東から)



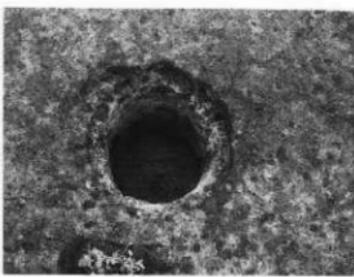
3 SK03 土坑完掘状況(西から)



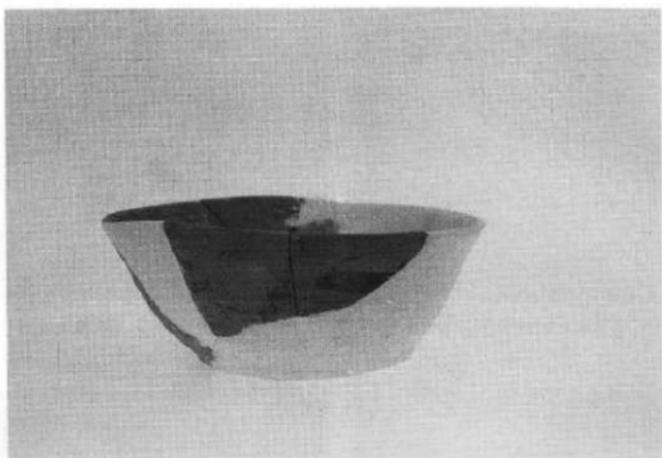
4 SK05 土坑完掘状況(東から)



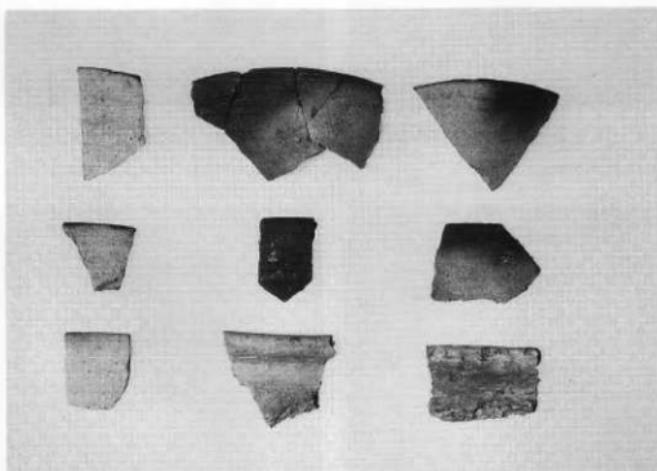
5 SK06 土坑完掘状況(西から)



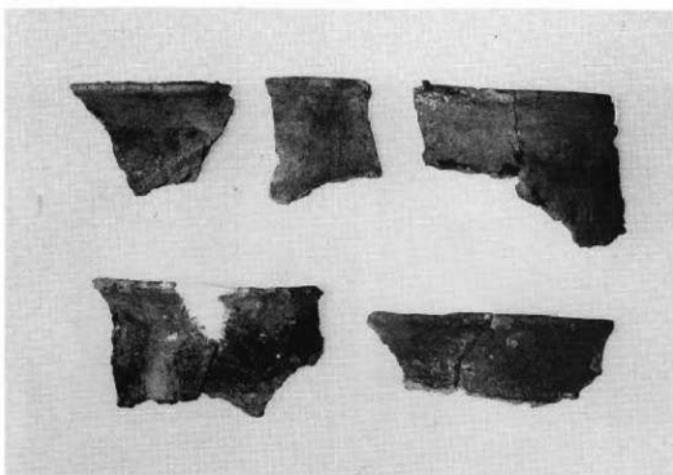
6 SK10 土坑完掘状況(北から)



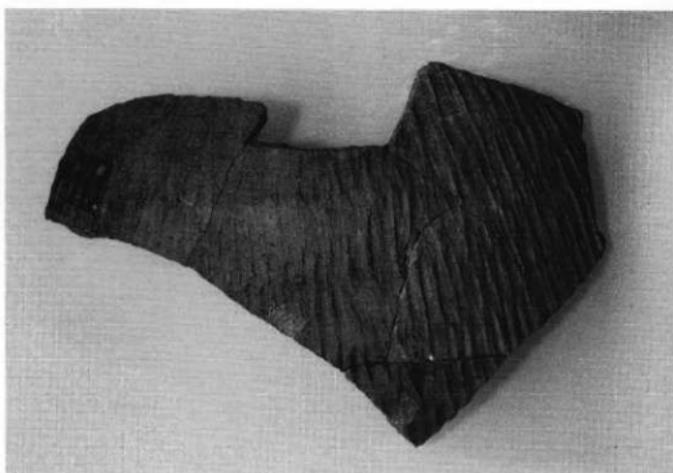
1 S I 0 1 壓穴住居跡出土墨青土器



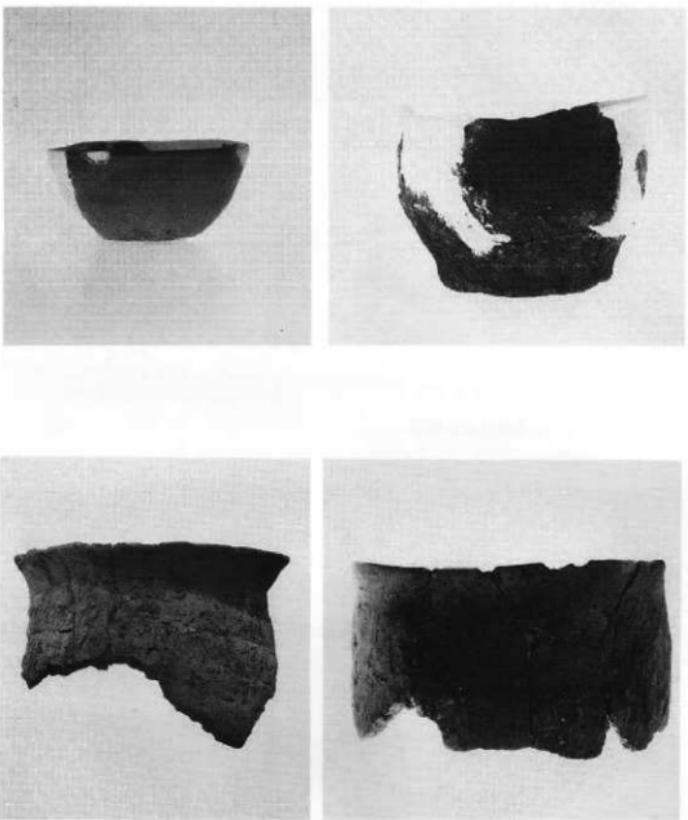
2 S I 0 1 壓穴住居跡出土土篩器



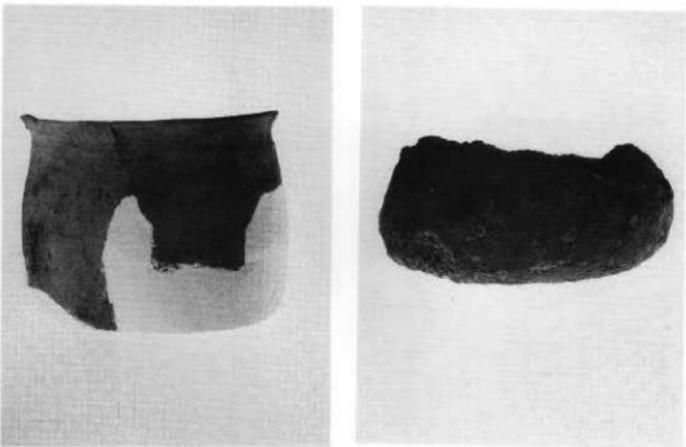
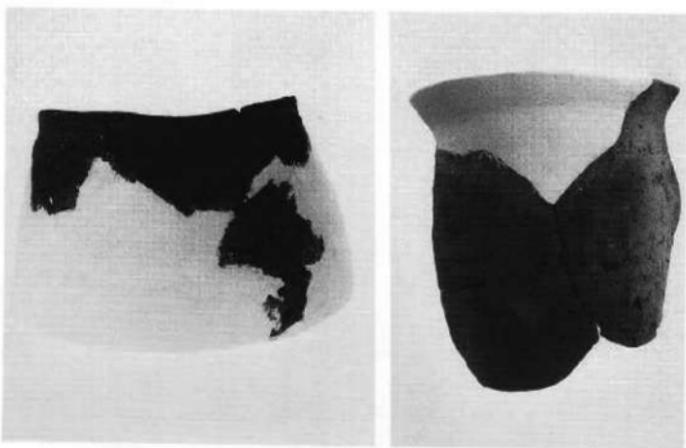
1 SIZHUTANGZHUANG SITE POTTERY FRAGMENTS



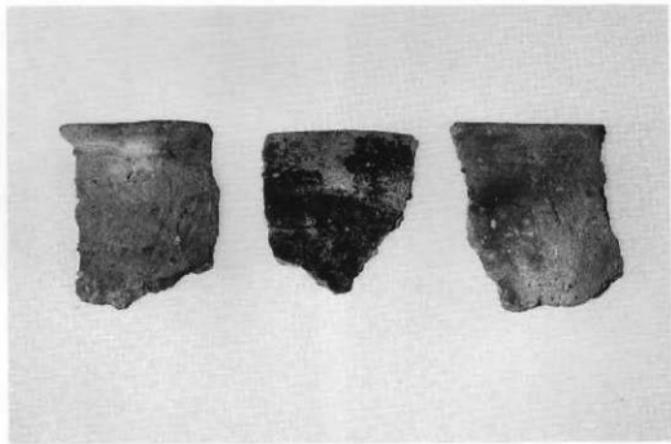
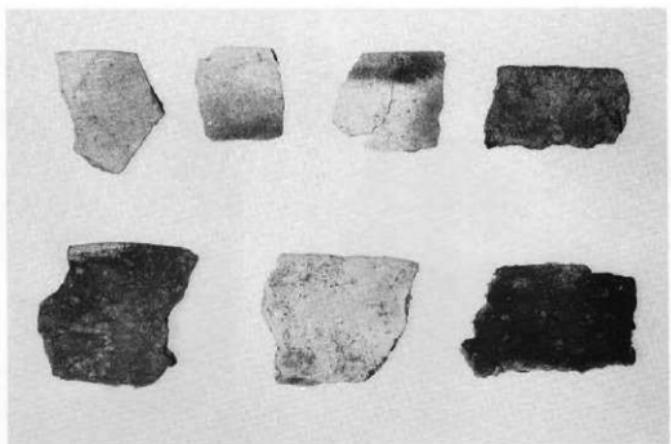
2 SIZHUTANGZHUANG SITE POTTERY FRAGMENT



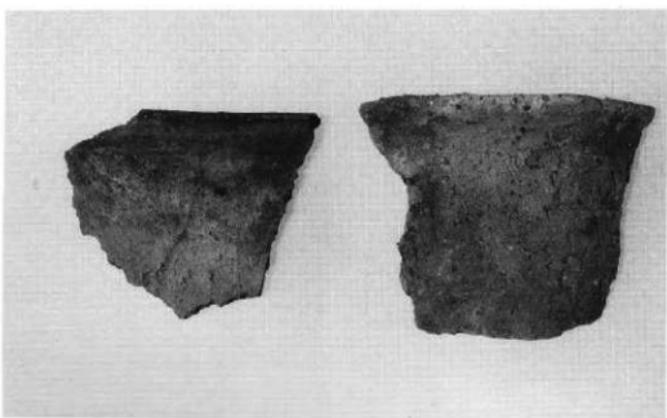
S102 壓穴住居跡出土土篩器



S I O 2 堅穴住居跡出土土師器



S I O 2 壘穴住居跡出土土器

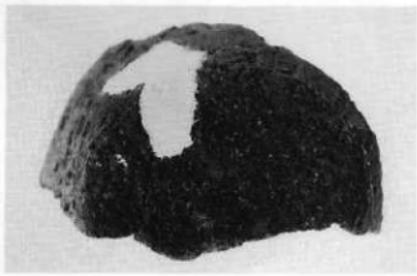
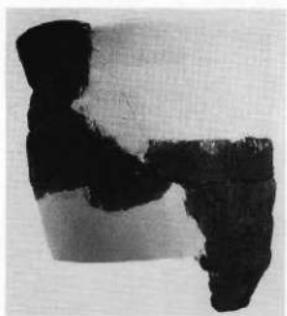
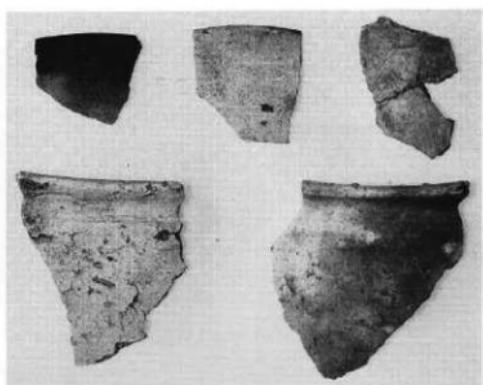


底部擴大

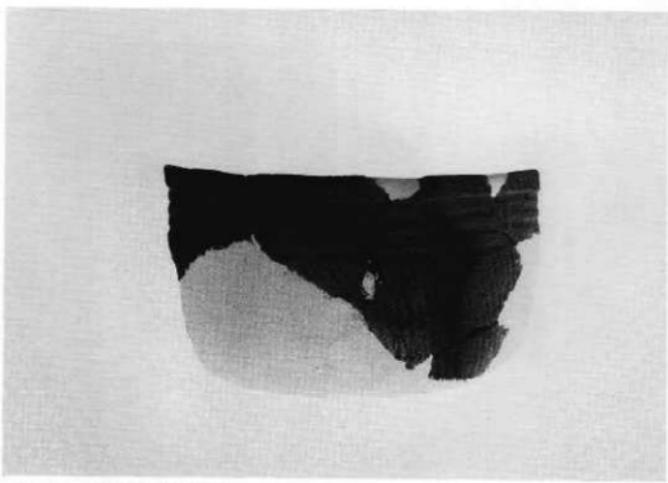
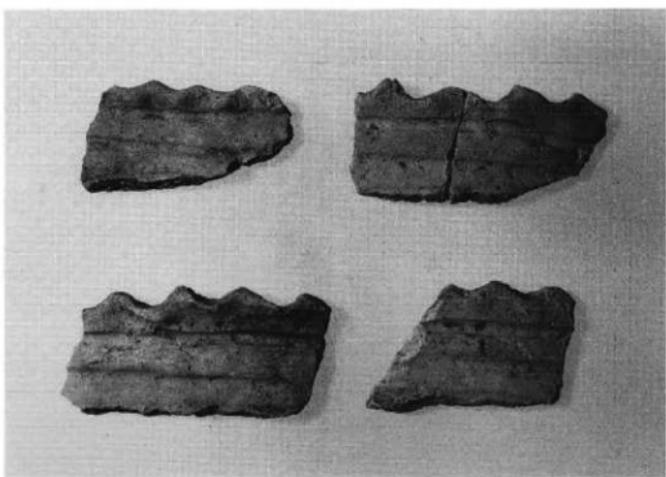
羽口



S I O 2 壓穴住居跡出土土器・土製品



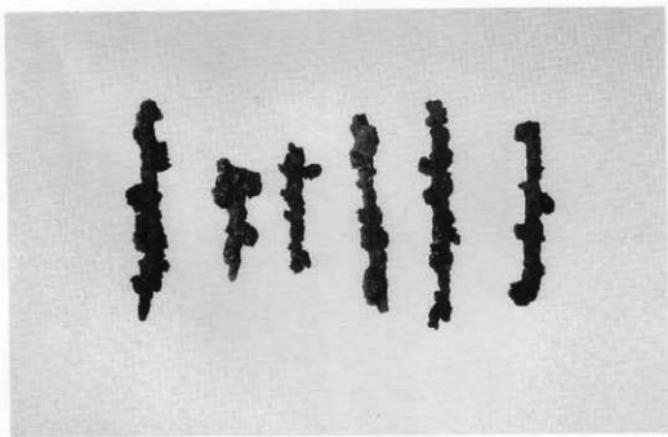
S I O 6 壅穴住居跡出土土師器



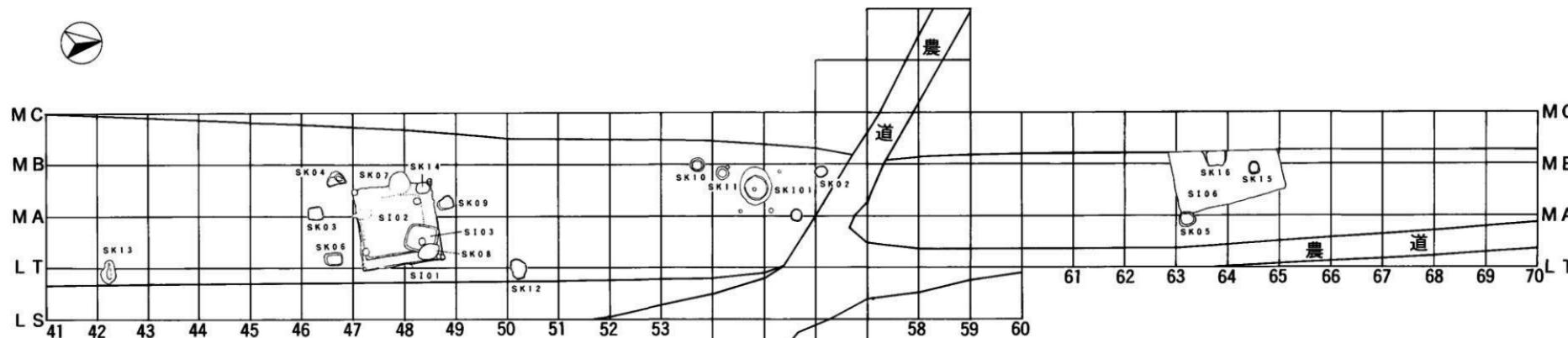
SK101 壺穴造構出土土器



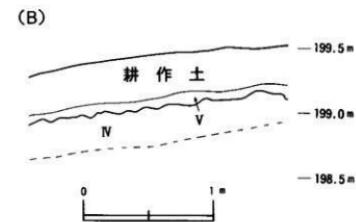
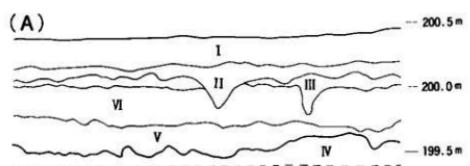
1 SK05 土坑出土土器



2 SK15 土坑出土鐵製品



0
8 m



- I層 黒色土 (10Y R 2 / 1) 軽石粒少々含む。
II層 黒色土 (10Y R 1.7 / 1) 軽石粒をやや多く含む。硬質。
III層 黄褐色土 (10Y R 5 / 8) 大湯浮石層。
IV層 黑褐色土 (10Y R 2 / 3) 少量の軽石粒、焼土含む。
V層 褐色土 (10Y R 4 / 4) 地山漸移層。
VI層 明黄褐色土 (10Y R 6 / 8) 地山。

第28図 造構配図(上)、基本土層図(下)